
赤龍と田舎領主の娘

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤龍と田舎領主の娘

【Nコード】

N9241Q

【作者名】

春

【あらすじ】

龍が治める西の端の国

戦闘要員の赤龍は愛情に飢えていた。

田舎領主の娘は現代日本で92で死んだ戦時中生まれの婆ちゃん。
「貴方のどこが恐ろしいの? (コロ…愛犬…みたいな) 優しい目を

してるわ」

無自覚平凡娘と強面^{コワモテ}人外との恋愛物語

平凡娘と最凶な人外（前書き）

序章

平凡娘と最凶な人外

龍の護る国エーティス

この世界の西の端に位置するこの国は様々な姿の龍が人や獣と生きる国。

まるでお伽噺だとこの世界に産まれて間もなく思ったものだ。

しかしお伽噺ではなく現実でこの国の皇帝は黄龍ジルヴァーン様

姿を拝見したことはない。というか不可能だ

龍と生きると言っても皇帝以下少なくとも八匹の龍は雲上の方。この国の支配者であり、人によっては理とも言う。

何故理か？

すなわち八匹の龍の方々は各々司るものが異なる。

例えば水龍アルテナ様

そのお姿は日本神話の龍と同じく蛇を長くしたような…失礼。こんな言い方をしたら不敬罪になる。まあ理解は出来たかと思う

ちなみに西洋の龍というのは龍というよりドラゴン？でスマートさが無い…失礼

話を戻す

アルテナ様は水を司る。雨を降らしたり海を自在にコントロールされる

他に金竜（鉱石を司る）土竜（土を司る。ちなみにモグラではない）火龍（焰を司る）風龍（風、台風、竜巻を司る）雷竜（文字通り）氷竜（文字通り）樹龍（樹木を司る。生命の象徴）等々

八匹の龍を治めるのが皇帝なのである

更に話を戻そう。何故私がこの世界にない日本や西洋がわかるか。もうある程度予想はついているのだろうけど。

私は日本の関西地方に住んでいたのだ。ちなみに享年92歳だった。第二次世界大戦だって生きたし、その後の高度成長期もオイルショックも平成の世も生きた。ひ孫迄抱くことが出来て大満足

だったのに。

さあじい様に会つかね。と眩しさに目を開ければ私を覗き込むお嬢さん。

はて？

「可愛い私のレイン」

.....遠い目

平凡娘と最凶な人外（後書き）

見てくださってありがとうございます

領主の娘の生活（前書き）

まだ出会いません

領主の娘の生活

レイン・・・今生の私の名前。

家名はシュレイア。大陸の西の端の我が国の、最も東に面した田舎を与えられた階級で言えば中級の領主の家名である。

主な産業は養鶏・畜産・農業・林業・・・まさに田舎だがまだ私がかく私ゝであった頃独り立ちして生活も穏やかになった頃、長男に北海道に旅行に連れて行ってもらった事があるのだがまさにその光景にそっくりなので、昔懐かしき愛しい時間を思えば田舎も素晴らしい。

特に大昔は一時町から動物が消えた事を覚えている故余計にこの地に生きる動物を愛しく思う。

領主とは名ばかりで私も兄弟姉妹も伸び伸び暮した。私など、最も好ましいのは羊の小屋を掃除している時なのだから庶民具合は知れるだろう。

良いのだ。だって私は元々庶民。他の領主の暮らしなど聞いてると余計今の暮らしの方が愛おしい。

傍らの今年生まれ、漸く母の乳から草を食べるようになった子羊の花子を愛でながら髪を遊ばせる風に目を細めた

わふっ

少し間の抜けた鳴き声に笑いながら鳴き声のした方向を見てみれば私の愛犬のコロがてくてくと寄って来るところだった

「コロ、おいで。毛を繕ってあげる」

私の格好と言えば領主の娘にはあるまじくも、現代日本で言ったら<ツナギ>の様な衣服に腰には太めのベルト。想像してほしい。そう、大工のお兄さん達がぶら下げているような小さなカバンを下けている。カバンというのはちよつと違うかもしれないが。ようは工具やブラシ、毛刈り用の鋏が入っている

そこからブラシを取り出して毛を繕えばコロは気持ち良いようで円らな瞳がトロンとさせた

他の領主の娘は沢山の家庭教師に囲まれ、分単位で予定を組まれ、動き辛いドレスを身に纏って御淑やかに慎ましく（生活が。というわけではないようだ）暮しているのに対し、これが私の暮らしだった

不満一つなく、日々穏やかに毎日少しずつ違う移ろいを見つめ家族仲良く、領民とも多分仲良く過ごす。

私が生まれ育ったのがこの地で本当によかったと、生まれて何度思ったか分らないがそう思う。

ぼーっとして愛犬コロの頭を撫でながら牧場を眺めた

「レインー」

「レイン！」

「はい????」

私を呼ぶ声に応えれば、優しくも厳しい父母が呼んでいた

「レイン、チーズケーキの売れ行きは上々だ。日保ちしないのが玉にキズだがな」

「東の大陸からコメという植物を手に入れたわ。貴女が昔言ってた奴よね？栽培できる？」

「今度は多少日保ちする菓子を創ってみるわ。」

本当に？母様！！とつても素敵だわ。もちろんよ！！腕が鳴るわ！」

父母は私に前世の記憶が有る事を話している。まあボ口を出してバレてしまったわけだが。おかげで兄弟姉妹も知ってるこれはシュレリア家の秘密だ。こんな突拍子もない事、信じられるはずはないから、バレた所で問題ないけれど。うちの家族は信じてくれたから、頭の可笑しい人だと思われても気にせずにいられると思う。多分。

きつと、私が<私>として長く生きたからこそ多少の事では動じないし、生きてきた年月はそのまま累積し知識となるわけだから、今の私の為になっている。つくづく長生きして良かった

もしこれが戦時中に死んで転生してたならパニックを起こしたりしていただろうし役に立った事もほとんどないでしょうから。

領主の娘の生活（後書き）

書き直しましたー。段落？減らしましたが見にくくないですか？？

傷を負った焰（前書き）

出会い。ちょっと血なまぐさい？

傷を負った焰

それは突然のことだった。さあ今日も羊の元に行きましょう。とつなぎを着た時

窓から見える東の森が一瞬で焼け野原になったのだ
そうして響く悲鳴
何かが暴れる大きな音

部屋のバルコニーから身を乗り出せば焼け野原となった森で蠢く赤い何か
眉をひそめすぐに部屋を出た。向かうはもちろん東の森

東の森、があつた場所にはたくさんの人ばかりと焦げた匂い、鉄の匂いが充満していた
眉をひそめたレインは、しかし人を掻き分け前に出る。どうにも嫌な予感がするのだ。虫の知らせとでもいうべきか。

森があつた筈の場所には血を流し荒い息をする大きな紅い龍がいた。息をするたびに口からは焰が出ている。
レインは一目でわかった。この龍はこの国の最高位の八龍の一体。焰をつかさどる赤龍という事に。

しかし可笑しなことに、これほど人が集まるのにかかわらず誰一人として手当てをしようとする人間がいないのだ。なんてこと。血を

流し続けるこの龍が最高位であろうとなかろうと怪我人に必要なのは迅速な治療だ。それをレインは遙か昔、こびり付いた苦しい時代で経験している。少しでも作業が遅れれば死に直結するのだ。レインは群衆から二歩三步と赤龍に近寄る

<近寄るな>

「何故？」

<理由が必要か>

何か酷く阿呆な事を言われた気がした。

「必要でしょう。怪我人の、否、この場合怪我龍？の治療をしなければならぬ。その傷は酷いわ。大した理由でも無ければ治療させていただくし、それには当然近寄らせてもらっわ」

私の言葉に龍はない眉を寄せたように感じた

<放っておけ。我は赤龍ぞ>

「馬鹿でもないんだから見たらわかりますけど。それとも私、そんなに間抜けに見えるんですか？だとしたら流石にショックなんですけど」

即答し逆に尋ねれば今度は意味がわからないと見返された。いや、そんな見返されても。こっちが意味分かんない。

<赤龍は戦と破壊をつかさどる

血に穢れた龍に近寄りたくなかつた>

自嘲するセリフ。だが、だからどうした？と思う。
正直レインが赤龍を放置する理由にはなりえない。

近寄るレインに今度は赤龍は暴れだす。触れるな、見るな。と叫ぶ

<我が恐ろしかろう！！それ以上、近寄るな！！！>

暴れると同時に赤龍とレインの間で火が上る。狙ってやった訳ではないようで、少し焦る赤龍が少し幼く見えた。龍と言えば万年を生きたというのに。亀みたいだ。鶴亀の。・・・こんなアホな考えしてる暇はないんだけど、ついつい思考が横道に逸れた。

なおも私が近寄るのをよしとしない赤龍に溜息。

「貴方のどこが恐ろしいの？（コロ…愛犬…みたいな）優しい目をしてるわ」

どキッパリと言ったのけたレインを赤龍は凝視して固まった。何か可笑しな事でも言っただろうかと疑問に思うも固まってる今がチャンス。横で上がる炎など気にも留めない。そんな事気にしてたら何も助けられないのだ。久しく炎を近くに感じつつ（こんなすぐ傍でこんな高温の炎を感じたのは数十年ぶりだ）赤龍の怪我の具合を確かめる。

本来龍族は怪我などしないはずなのだ。固い鱗は鉄をも跳ね返すはず（そう教本に書いてあった）。戦闘に特化した赤龍ならなおのことだ。なのに夥しいほど血が流れるのはおかしい。近くで燃える炎

に頓着せず血を流す患部を見る

「毒かしら鱗の周辺が変色してるわね？矢じりが埋まっているからこれが原因？麻醉って龍に効くのかしら？

ねえ火龍様。フリーズから解けて下さる？今から麻醉打って毒の塗ってある矢じりを抜くわ。ついでに暴れないで頂けると助かるのですけど。」

<・・・・・・・・・・（呆然）>

「・・・・・・・・まあ良いわね。」

呆然として戻ってこない火龍に一人ごちて麻醉（本来なら対象を速攻で眠らせるのだが赤龍にはすぐに効果が現れない）を打ち効果が現れたら（それもまだ麻痺だけ）すぐに矢じりを抜いた。幸いにも麻痺は完璧らしい。毒消しの薬草を患部に張り付ければ漸く火龍の視点がレインに定まった

<お前は我が怖くないのか？>

「なんでそんなにビクビクされてるのは存じませんが、怖くなどありませんよ。怖がる必要などないですから。」

じき麻醉が効きます。次に目覚める時は当家かと思いますがご容赦くださいね。」

レインの言葉の通り間もなく酷い眠気が襲い火龍はあらがえない眠りについた

最後まで己を畏怖せず視線が絡まるレインを見ながら

<（お前は我と視線を合わし言葉を交わすのか・・・）>

傷を負った焔（後書き）

レインは年のせいかな動じない子。すこし編集。ご指摘いただき改行減らすようにしてます。見にくければ教えて頂けると嬉しいです

領主の娘らしくない娘（前書き）

我等が領主の娘

領主の娘らしくない娘

眠った火龍にああいったものの巨体の持ち主。どうやって運ぼうか
そんな私の思いを汲み取ったのか、火龍の巨体は人型に変わった

…どうやら本格的に眠りに落ちたらしい。

それでも、155cmしかない私を遥かに凌駕する身長と素晴らしい
体躯の持ち主を運べるとは思えない

馬を呼ぼうか迷って、見物人の一人を認めてその迷いも霧散する

「牛舎のおじさん、そのリヤカー貸してくださいさる？」

「へ？ああ・・・構いませんよ」

「有難う！」

あら、丁度良いところに。クラリス」

「毛布を？」

「聴くて助かるわ。リヤカーに敷いて欲しいの。」

皆が赤龍様を怖がっている理由はよくわからないけれど、男性は彼
をリヤカーに乗せてくださる？」

レインの言葉に顔を見合わせた男達は我等が愛する領主の娘の頼み
だと苦笑して傷に障らないようリヤカーに乗せた

「領主の館に運べば？」

「あら、それには及ばないわ。リヤカーさえ有れば私にも運べるも
の。」

皆は仕事に戻って。クラリス、私が乗ってきた愛馬がいるから一足先に屋敷に伝えに行ってくれる？

多分兄上がいらっしやるのよ。部屋の準備をお願いしてきて？

あら、カーティス！ナイスタイミングで現れたわね。王都に早馬を頼めるかしら？火龍様が怪我をなされて当屋敷にいること、あと東の森が焼失した事も。ひょっとしたら復活させる事が八龍の方なら出来るかもしれないもの。

火龍様の世話は責任もって

シュレイア家次女のレイン「シュレイアが致します。と伝えて」

じゃあ私は屋敷に帰るわー

とリヤカーを牽いて帰る領主の娘。真に領主の娘らしくない娘である

領民たちはそんなレインを見送り、焼けた東の森を見つめ溜息を吐いた

「レイン様を見ていると赤龍様を怖がっている自分がアホのように感じないか？」

「同感だよ。」

「噂に踊らされる俺らも俺らだけどき、全く噂を気にせず真横で火柱上がったも気にしないレイン様もレイン様だよな・・・」

「仕方ないよ。レイン様だもの。」

「そうだな

なんたってこのシュレイアを都会の様な生活設備にしようと先頭だ

って動いてくださる領主の娘らしからぬ方だもんな……」

その言葉の端々にあるのは、憧憬親愛

領主の娘らしからぬ娘を、だからこそ領民たちは愛してやまないのである

「さて、仕事に戻ろうぜ」

「いけない。そろそろ農作業に戻らないと。日が暮れちまうよ」

「……日暮れまでに羊の毛を刈らないと行けなかったのに……間に合わない」

「じゃあないよ。明日の朝もすればいいさ」

「眺めるだけ眺めとくんじゃなかったねえ」

そうして領民は自分の仕事に戻って行った。普通はもう少し騒ぎになるはずなのだがソレもこれもレインの登場と元々のこの地に住む人々の性格もあるのだろう

けっこうあっさり東の森から領民は去っていったのであった

領主の娘らしくない娘（後書き）

領民に愛されるレイン

瞳に映る平凡な娘（前書き）

火龍に平然と接する人間は初めて

瞳に映る平凡な娘

赤龍が目を覚ましたのは夜中の事だ。

水を求め目を開ければ見知らぬ天井に疑問が浮かぶも、そういえば可笑しな娘が当家云々。等と言っていた気がする。という事はあの娘の住居か

怪我の影響だろう、起き上がることは出来ず、四肢には力入らず寝台に投げ出されている。

酷く喉が渴いている。戦闘が終わった後はいつもこうだ。水を欲して目を周囲に向けた

「あらお目覚めですか？」

突然の声に驚く。しかし声の主は視界に入らない。

顔すら動かせぬ我を見かねて私の元に歩み寄って来た声の主は、記憶に違えなければ確かあの娘だ

農民のような格好からドレスに変わっているが、あの、我と視線を絡ませた稀有な娘

「何かお求めで？」

「水を…」

「畏まりました。上体を起こしますね。傷に障ったら申し付けて下さいませ。」

娘はなんの躊躇い無く我に触れ抱き起こす その動作は優しく戸惑ってしまう

ベッドヘッドに積まれた羽毛枕に支えられるように座ると水差しが差し出された

しかし身体が動かない

水を求めているのに、動けないとはどんな拷問か。様子を見守っていた娘が見兼ねて口元に水差しを持ってきた

口を緩慢に開ければゆっくりと流し込まれる水

垂れぬように気遣いか布を当て、私の様子を見る

水は乾いた身体に染み渡る。

まさに命の水

結局我は水差しの水を全て飲み干した

ベッドに再び寝かされる。やはりその一挙一動は静かで優しいものだ。傷に触れぬよう精いっぱい気をつけているのが分つてむず痒い

そうして、漸く娘の顔をまともに見ることが叶った

娘は、どちらかと言えば凡庸

美しくも可愛くもないが、醜いわけでもない平凡な娘。貴族や領主の娘を遠目に眺めた事はある。皆一様に身なりに気をつけ、顔に白粉ロイを塗りたくり鼻が曲がりそうになるほど香水を振り掛ける。貴族たちはほどではないが、庶民の娘も似たようなものなはずだ。女と言うのは素顔を隠し偽りの仮面で他を欺く。可愛いものじゃないか。と同じ八龍の女ったらしが言っていた

あれらを可愛いと言うならこの娘はまぎれもなく平凡で凡庸。ある種異質だ。

人の年齢でいえばまだ20過ぎていないだろう。しかし雰囲気はとても大人びていて凜としている

血にまみれた我に平然と近寄った事といい、間近で炎が上がっても動じなかった事といい

年相応には見えない。

私の視線を違う意味で捉えた娘はベッドから二歩下がり最上級の礼をした

「私は東の端の領主の娘

次女レイン」シュレリアと申します。

王都には一昨日早馬を頼みましたので二、三日中にはどなたかいらっしゃるか

それまでのお世話は私が致します。不自由があれば申し付けて下さいます

「世話になる

………レインと申したか

そなた我が恐ろしくないのか？」

「特にその様に感じませぬが？」

やはり即答。今まで我を見て怯えていたものの方が間違いのように
思えるほどの清々しい即答だった。

「我は火龍

血に穢れた野蛮な龍でもか」

自分で言っ て痛む胸に自嘲する

何度も何度も陰から時には表から言われていたセリフではないか。
それでも、それでも娘は真っ直ぐだ

「これは可笑しな事を仰る

貴方が血を浴びるのは我等の国を守護しているから。野蛮な龍等と
思いませぬ。

貴方の瞳は（コロのように）優しいではありませんか」

平凡な娘の筈なのに、

我を怖がらぬ。血を厭う無力な女のはずなのに

我を畏れぬ

長き時を生き当たり前に甘受してきた言葉を否定し、初めて我にそ
のようなセリフを吐いた人の子

何とも珍妙な娘か

しかしそのセリフが確かに私の痛む心を掬いあげてくれたのを、確かに感じたのだった

レイン・シュレイア

我はその名を記憶に刻もう。

誕生して幾年月、この赤龍を唯一恐れぬ娘

瞳に映る平凡な娘（後書き）

編集しましたー！。 見にくかったら教えてくださいませ！！

黄龍の憂鬱（前書き）

赤龍とは

黄龍の憂鬱

龍の護る国エーティス

国のほぼ中心部にそびえる大きな山の頂上に黄龍と八匹の龍の住む宮がある。

その宮の中でも別格の広さを持つ黄龍の宮。

玉座に座るジルヴァーンは、届けられた書状に目を伏せた

「黄龍様、どうなされたのですか」

「シヴァ、樹を司るそなたに急ぎ行つて欲しい場所がある」

ジルヴァーンの言葉にシヴァは片眉を上げる

「シュレイアの土地だ。赤龍が怪我を負って滞在しているらしい」

「なんと赤龍が……？」

「東の森が焼失したようだな。シヴァは森を復活させシュレイア家を訪ね赤龍を連れ帰れ」

「畏まりました」

しかしひよつとしてシュレイア家の者が赤龍を屋敷に？」

「文にはレイン〃シュレイアという娘が館に連れ帰った。と」

「人間の女性が連れ帰ったと……？あの赤龍を？」

それが事実ならば、喜ばしい事ですね……」

シヴァが感心したように溜め息を吐いた

赤龍はこの国で存在する数多の龍族のトップクラスの破壊力を有する。司るのは焰。火でも火炎でも炎でもなく焰だ。純然たる力の勝負なら黄龍とて並ぶ事叶わない。それほどの力を有している。

だが大きな力には代償がある

赤龍は対等たるものがおらず本質は孤独。

どのような生物でも孤独で生きていく事など出来ない。故に自棄になって戦闘で特攻…なんてザラだ

黄龍は赤龍を大切に思う。黄龍と八龍の関係は他とは違う絆で結ばれてると思っている。

だが、赤龍は早く死にたいのだろう。己を受け入れぬ世界を憎み悲しみ絶望の中にあるが故に

赤龍の事は国民ならば誰もが知る。

曰く、荒く猛々しい赤龍

曰く、血に穢れた赤龍

曰く、野蛮な赤龍。

彼を人々も宮の半龍の侍従達も皆畏れ最低限にしか近寄らないのに、書状の娘は屋敷に。と書いてある。

もしこれが本当ならば赤龍の救いになるやもしれぬ。

そうならばいい。黄龍は願う

荒く猛々しい力とは違い、その本質は寂しがり屋の哀しき龍
長く長く同位の八龍と黄龍以外に受け入れられず孤独の最中サナカを生きる
受け入れて欲しい。

大切な大切な同胞ハラカラなのだ

無くしたくはない

生きてほしい

共に世界の明日を見続けたい。

未来の光の中胸を張って威風堂々と生きてほしい

まだ見ぬ稀有な心の娘に心から願った

黄龍の憂鬱（後書き）

編集しました

娘の心に触れる

聞き流すところだったが、娘…レインは言った
一昨日早馬を送った。と

通りで。体が動かないのは怪我のせいもあるだろうが、寝すぎた気
だるさもあるのだろう。寝ない事には慣れているが、寝すぎた事に
体が驚いているのかもしれない。

・・・おかげで眠気が一向に訪れない

これほどただ無為に宙を眺めていたことがあったか。

天井を睨むようにジツとしているのが可笑しいようでレインはクス
クス笑う

「親の敵カタキのように睨まずとも宜しいではありませんか。せつかくの
身体を休める機会ですのに。」

クスクス笑うレインの、言葉も態度も身分上の人間に対する礼儀を
心得たしかし柔らかない態度

こんな態度を取られたことがなくて戸惑う

皆、火龍に対する畏れで何時だってそいつには何もしていないのに
怯えられた

何時だって皆身体を、声を震わせていたのに、
何時からかその反応こそが当たり前だと思っていたのに。

視界に映る人の娘は、当たり前のように態度を変えない

私の戸惑う視線を受けたレインは一瞬首を傾げるも、先ほど問うた我が問いを思い出したのか得心いった。とばかりに視線を定めた。

「人と言うのは、噂に踊らされ、大多数の意見に従うのが世の常。また、自身にはない圧倒的な力に脅えるのは力無いものには仕方無いでしょう。」

「……けれどまあ、脅えるせいで大切な事を見落としていますわね。」

レインの言葉に首をかしげた。

「大切な事……？」

「左様ですわ」

皆分かっている筈なのに、ね。当たり前過ぎて見過ごしているのでしょう。

火龍様は、この国を守護しておいでだという事を。
貴方様がいらっしゃらなければこの国に平穏はないでしょう？

「ただ噂に聞く特攻は、貴方が守護する国の民の一人として、止めていただきたく存じますが」

「守護してる……？破壊しか、能のないこの我が？」

「左様ですとも。」

水龍様達のように強力な結界を張るのも守護。

そうして、第一線で戦うのもまた一つの守護の形でございましょう？」

己の力を護る力と思うた事は一度とてなかった。だが娘はそれも守護の一つの形と言う

「こんな恐ろしい力が守護の形と……？」

「確かに焰は強い力ですわね。万物を燃やし無にする焰。

なれど、火龍様御自身がその御力を恐ろしいと思っていらっしゃるならば大丈夫ですわ。

力に溺れることも、力に潰されることもないでしょう？

大きな力は慢心を誘う。私はそれによって壊れてしまったものを、遠い昔見たのです。何もかも、灰燼と化したその力を私は今でも覚えております。

とてもとても、恐ろしゅうございました。

力は、扱うものによって全く異なる効力を発揮するものです

火龍様が扱いになるのなら破壊の力も守護の力に変わると、私は思います。

どうぞ御自身で御自身の力を否定されませぬよう。己を否定されませぬよう。

貴方は確かに我が国の尊き御方なのですから。

さあ、直に朝が来ます。もう一眠りなさいませ。体は休息を願っておりますよ」

聞き分けのない幼子に語りかけるように、穏やかな顔で語ってくれたレインは、そう締め括り、日々の生活で荒れてささくれのある手を瞼に乗せた

このように触れてきたものは初めてで、レインに会ってから、初めてはばかり経験してると思った。くすぐったいのは慣れないから。

つきつきりで看病された事も、

正面から視線を絡めて言葉を交わした事も
畏れられなかった事も

すべて慣れない。くすぐりたい
だが、何よりも嬉しい

娘の心に触れる（後書き）

編集しましたー。見にくかったら仰ってください！

樹龍の驚きと喜び

赤龍が目を覚まし、レインの心に触れた翌日、太陽は中点を指そうという時の事

屋敷に扉を叩く音が響いた

「客人か？」

「来客予定なんて無かったと思いましたが。」

「……いけないわ。今日は誰もいないんです！！」

少し御側を離れます。そう言ってレインは赤龍の休む部屋を、身分ある娘にあるまじくも駆け全力疾走していった

毎度毎度、彼女には驚かされてばかりだ。赤龍は彼を知る者ならば驚くほど柔らかな表情をしていた。

一方のレインは、無駄に長い廊下を駆け抜け階段を5段飛ばしで降り、正面の無駄に大きな玄関扉の前で息を吐く

流石に荒い息でお客様を迎えることはできない。この辺だけは母親の躰の賜物だ。

ゼーハーゼーハーという荒い息が整って漸く扉を少し開ける。こんな時、現代日本を生きたレインはインターホンがあれば良かったのに。と思ってしまう

「……失礼。此方に赤龍が御邪魔していると伺ったのですが」
赤龍も結構な美男子だが眼前の客人も結構な美人さんだ。

流れる碧色の髪を緩やかに纏めた見上げる身長美人さんを失礼のない程度に見て、

その正体を察して目上に対する最上級の礼をして見せた

「樹龍様とお見受けいたします。私、当家の次女でレイン＝シユレイアと申します。

赤龍様の元へご案内いたしますわ」

どうぞこちらに、と先導して案内するレイン。まさか肅々と歩く娘が先ほど廊下と階段を全力疾走したとは思えないだろう。

樹龍もまた、眼前の後ろ姿の娘が書状の娘かと不躰ではない程度に眺めた

目立つ顔立ちではないが、きちんと礼儀は学んでいるようだし、他の領主の娘と違い、龍族の優秀すぎるほど優秀な鼻を刺激するような香水や白粉おしろいの匂いもしない。

どちらかと言えば若草の匂いのする現段階においてはかなり好印象が持てた

「失礼いたします。赤龍様、樹龍様がおいでになられまいしたわ」扉をノックし中から赤龍の許可の声が聞こえると扉をゆっくり開けて樹龍の中に

「御話もあると思いますので、私はお茶を用意してまいります。何かご入り用でしたらベルを鳴らして下さいませ」

及第点。というか態度としては満点に近い。
独りレインに評価をした樹龍はレインを見送り、同じく視線だけで彼女を見送っていた赤龍に目を向ける

「今回は随分酷い怪我だったのか？」

「ああ・・・龍の牙で創られた矢で射られた。猛毒が塗ってあったせいで起き上がれなかった。

最も、もうそいつらは殲滅したし

毒はレインがすぐに処方してくれた。

・・・今は龍の血が消しきれなかった毒を消すために渦巻いてるせいで体が重いだけだ」

「ならばよかった。

・・・黄龍様が案じておられたぞ。全く、毎回無茶をする。すぐに特攻に走るのはお前の悪い癖だ」

最近似たセリフを聞いたと赤龍は苦笑した

「・・・レインにも言われた。噂に聞く、特攻をおやめいただきたいと。」

「（良い表情じゃないか。）・・・随分心を開いているのだな」

「・・・ああ。あいつは、俺を見て怯えぬ。

優しい目をしていると言った。

そんな訳がないと、わかっているのに、ちゃんと視線が絡まり、怯えられることなく会話をする事が嬉しい。

こんな人間もいるのか・・・と驚いた」

「そうか。私からも礼を言わねばなるまい」

赤龍を救ってくれたことへの礼を。心から。

・
・
婚約者などいないのであれば是非赤龍の番にな^{つか}って欲しいものだな・

黄龍様に進言してみようか
きつとあの方も赤龍のこのような穏やかな顔を見たら是が非でも賛
成なさる事だろう

龍の力

赤龍を微笑ましく見ていると扉をノックする音

「失礼いたします。レイン〓シュレイアで御座います。部屋に入ってもよろしゅうございますか？」

「これは失礼した。今開けましょう」

私の背丈より高い扉を開けば両手にお茶と茶菓子を持ったレインがニコリと笑った

「有難うございます。樹龍様」

「いいえ。此方こそ。」

色々な含みを込めたが、きっと彼女は茶を淹れた事に関する礼だと思っただろう

テーブルに運んできたものを置いた彼女は、実に慣れた手つきで茶を入れ、初めて見る、多分茶菓子（だろう。甘い匂いもするし。）を切り分け皿に乗せた

「赤龍様もう起き上がれますか？」

「ああ。大丈夫だ」

「御二方のお口に合うかはわかりませぬが、これはチーズケーキと申しまして、ここ、シュレイアの領地の特産を使った濃厚で癖のある菓子にございます」

耳慣れぬ名だ。それにこのような白い菓子など見た事がない。

「これが、シュレイアの特産なのか？」

「はい。」

シュレイアは見ての通り田舎ではありますが、農業や牧畜、畜産が盛んなのです。

これは乳牛からとれるミルクを加工して作りましたチーズが入っているんですよ。まあそれだけではありませんが。

商人から、王都では砂糖漬けの果物が菓子の主流と伺ってましたので、珍しいかと思い持ってまいりました。お口に合えばいいのですが・・・」

彼女の言葉に視線をくちーずけーき>に移す。

白い菓子は不思議だが、鼻をくすぐる香りに負けた。

フォークで切り分け口に入れると口の中が濃厚な香りと風味豊かな味わいで一杯になった

・・・・・・これは美味しい！

「赤龍様、お口に合いましたか？」

「ああ。美味い。」

「・・・あの、樹龍様は・・・なにやらキラキラした瞳でチーズケーキをご覧になっているようですが」

「・・・。樹龍は無類の甘党だ。紅茶に砂糖を10杯は入れる。」

「・・・それは最早紅茶ではないのではありませんか？」

「俺もそう思う。それに王都で主流の果実の砂糖漬けは味に差異なく単調で樹龍も随分飽いていた。この様な菓子は初めての味故感極まっているのであろう。」

幸せな（特に樹龍にとって）ティータイムも終わり

樹龍は此処に来た目的の二つ目に取り掛かる事にした

「レイン殿。

燃え朽ちた東の森に案内頂けるでしょうか？私は赤龍の迎えもですが、東の森の再生の為に派遣されたのです」

「そうでしたか・・・わかりましたわ。すぐに支度をしてまいります。

赤龍様、暫し屋敷で御一人となられますが」

「構わない。頼む樹龍。」

「はい。勿論です。」

「では樹龍様、少しばかりお待ちくださいませ」

礼をしたレインは踵を返し、早足で部屋を出て行った

「・・・ところで赤龍」

「なんだ？」

「領主の館なのにメイドや執事、それに勿論領主の一家はいないのか？」

「・・・・・・領主殿は集落に行つて今年の実りを確認して、領主の奥方殿は果樹園で同じく実りの確認を。レインの兄弟姉妹達は皆厩舎や牛舎やら鶏舎やらに出ていない。

メイドも執事も自分の事は自分で出来るからと最初から雇っていないようだ。」

「いやはや・・・通りで茶を淹れるのが手慣れているわけだ。

にしても本当に面白い領主一家だね。つくづく、興味深い。

今まで表に出て来てくれなかった事が悔やまれるほどだ。」

樹龍がしみじみ言えば、赤龍はどういう意味かと眉根を寄せる
それに答えようと樹龍が口を開けたその時、タイミングが良いんだ

か悪いんだか扉が開き、彼女が入ってきた。

先ほどまでの中流階級の娘が着るような女性らしいドレスではなく、彼女いわく<ツナギ>に。

お嬢様がこれでいいのだろうか。俺の考えを見越した赤龍は、この家では作業着として少なくとも子供は皆袖を通しているところそり教えてきた。それで良いのか領主一家！

気を取り直して東の森にやってきた私とレイン殿。

「盛大に燃え尽きたんですね」

森の<も>の字もないようなありさまに火龍の力の片鱗を見る

「再生できるのでしょうか・・・」

「大丈夫。」

私は再生をつかさどる八龍が一、樹龍。

力を使うため龍に姿を変えますのでお下がりください」

彼女が下がったのを見届けて、人型から本性に戻る

碧の鬣を風に揺らせる巨大な龍に。

空に昇った私は広大な森だった所に息を吹きかける

私の息が掛かった所から順に焦げた黒が生命の緑に変化していく。

燃え朽ちたかつての木の根元から黄緑の双葉が生え瞬く間に成長し、若葉は樹となっていく。

自然が数十年、数百年かけて育んだ命を龍の力で一気に再生させる。理の外にある力。それが龍の力だ。

1時間しないうちに燃え朽ちた森だったものは確かに元通り再生を遂げた

そのうちこの森を棲みかにしていたであろう逃げ出した動物も戻るだろう。

納得した所で彼女の元に人型に変わって戻る

「八龍様って凄いですねえ……これでまた薬草がとれます。領地の者を代表して感謝を……」

有難うございます樹龍様」

掛け値なしの褒め言葉に照れ、真っ直ぐ私を見て礼を言った彼女に此方こそ有難うと内心でつぶやいた。

龍の力（後書き）

感想有難うございます！！そしてお気に入り登録者数がびっくりな事になっていて、ポイント数も驚いています。これからも精進し頑張ってくださいのようしくお願いいたします

帰還

東の森を再生した樹龍はレインと共に屋敷に戻ると、夕方、赤龍の体調が完全に戻るまで滞在した。

レインはその間、甲斐甲斐しく二人の世話をし、丁寧で礼儀を踏まえた対応に赤龍のみならず樹龍にもすっかり好感が持たれた。最も樹龍のそれは確実に親愛だが。

「樹龍様、クッキーでしたら日持ちしますからお持ちになれますよ？」

「是非！」

「レイン、樹龍を余り甘やかすな。」

「赤龍は気にしないでいいぞ！レイン殿！」

二人の会話に笑うレイン。この二人は中々いいコンビだ

体調の整った赤龍、そしてしっかり手土産のクッキーを持った樹龍の見送りに屋敷の外に出る

「有難う！レイン殿。お土産もしっかり頂いちゃって。他の八龍に自慢しながら美味しくいただくよ！」

「・・・・・・世話になった。その、改めて、礼に来る」

「御気になさらず、樹龍様。気に入っていただけて私も大変嬉しゅうございます」

いいえ、赤龍様。私が勝手にした事ですわ。

次回、もし、いらっしゃるならば、赤龍様も楽しめる菓子を作りますわね。

こんなド田舎の地方領主のもとで宜しいのでしたら、何時でも歓迎

いたしますわ。

どうぞ御気をつけて。赤龍様も樹龍様もご自愛くださいませ」

丁寧な礼をすると樹龍様はひらりと手を振り龍に変わり空に昇る

「……………本当にありがとう。レイン、お前に会えてよかった。また、会いに来る」

「お待ちしておりますわ。赤龍様。どうぞご自愛ください。そして、今度は無傷でいらして下さいね。」

レインの言葉に苦笑して、ついこの間見た紅き龍に姿を変幻させ空へと昇る

赤龍は見送る娘を横目で見て、名残惜しくなる。

しかし今度来る約束も交わした。

今度は彼女の言うように無傷で会いに来よう。

彼女や彼女の家族の手伝いをして、一日を有意義に過ごす事が出来たならば、きっと何よりの骨休めになるだろう。

……………会えてよかった

心からそう思う。

帰還（後書き）

樹龍が当初と異なりチャラくなっててびっくり（笑）

そしてそして、みなさんお気に入り登録や感想、評価有難うございます！！

思い馳せる焰

赤龍の帰還を喜んだ黄龍は、もう一つの喜ばしい報告を聞いて穏やかに笑った

「そうか・・・シュレイア家の次女はお前を怖がらなかったか」

「不思議な事に、」

「嬉しいか？赤龍。」

まあ聞くまでもない事だな。」

今まで見てきた赤龍の表情カオの中で一番すっきりした表情を見た黄龍が微笑ましげに言った

「良い子でしたよーレイン殿。」

領主の娘にあるまじくもとても気安かったですし。凡庸な顔立ちですけど中身が素晴らしい。」

「樹龍がそこまで評価する娘も珍しいな」

「黄龍様。樹龍は菓子カオをレインにせびっておりましてよ。厚かましくも。」

「自分が出来ないんで僻んでるだけだろお前わ。」

それに黄龍様、事実彼女の作った菓子カオはとても美味しゅうございますよ！あとで紅茶とともに食されませんか？」

「（苛）」

「赤龍がそのように感情を表に出すのも久しき事。是非シュレイアの次女とは会ってみたいものだな
そして、勿論頂こう樹龍」

標高高きこの王宮では、当然のことながら地上より遥かに空に近い
頭上の満点の星空を火龍の宮で、仰ぐ

思い出すのは、たった数日、されど数日のこと。それも実質起きて
いたのは一日と少し。

寝かされた部屋からはシュレイアの領地が見えた。どこまでも続く
ような緑

優秀な耳が捉えた、シュレイアの地に生きる人々の今を懸命に生き
る命の声

何より、あの家は暖かった

レインは優しくかった

彼女の弟妹兄弟も最初は驚いていたもののすぐに慣れてくれた。時
折部屋を訪れては話をねだられた。

思えば、あんなふうに子供に懐かれた事などなかった。

だが彼女の穏やかさや隣にいる心地よさはいかに彼女の弟妹兄弟で
も及ぶ事はない

そうして、

シュレイアの地を思えば思うほど、この地が居心地悪い。

最低限にしか寄らせない使用人の、恐る恐るとした顔も
下位の同種も異種も己に対する表情は硬い。
何もしていないのに。だ。

それは、何時も通りなのに・・・

・・・何時も通りな筈なのに、一度温かさを知ってしまった己にこの場所は酷く物悲しくさびしい

たった数日しかいなかったのに、赤龍の心は既にシュレイアの地を求めていた

親愛の情なのか愛情なのかも区別がつかない焔が、知ってしまった暖かく揺れる感情

赤龍はまだ知らない

己のうちに小さく宿ったものの正体を

それがこれより先、自身にどう影響するのかも。

田舎領主一家

赤龍が樹龍と帰還し一番惜しんだのは末の弟だった

弟の名前はクリス

見た目は可愛らしい女の子の為か、カッコイイ男性に憧れるらしく、赤龍に対して兄姉弟妹の中で最もなついたのだ。

「姉上、赤龍様はもういらっしゃらない？」

クリッとした大きな目で見つめられ、レインは苦笑しつつも大丈夫と言った

「いずれ、いらっしゃると仰っていたわ。

それに樹龍様のカンジからしても又いらっしゃると思うのよね」「何より、

「会おうと思えば会えるわ。春桜会が近いし」

「そんなのもあったわね」

「「姉上」」

新たな声にクリスと振り替えれば、長女と残りの兄弟妹がいた

「夕飯よ二人共。話の続きはそこでね」

「今日の飯は俺とフェリが作った。冷めた飯なんざゴメンだ」

兄が言えばそれもそうかと食堂に移動する。視察から帰ってこない母と父を除く全員を待たせていたようで、育ち盛りも多いのに。とレインは少し話し込んでいた事を後悔したのであった。

「姉上、春桜会って何ですか？」

クリスの改めての疑問に長女長兄次女の三人は顔を見合せた

「一度は行ってるハズよね？」

「ちゃんとパーティーデビューはしたけど、確か4つか5つじゃなかったか？」

「基本私達、パーティーなんて出ませんものねえ」
上から長女長兄次女の順である

「えつと春桜会つてのはな、季節折々に黄龍様主催のもと、王宮で行われるパーティーの事だ
春にあるから春桜会。夏には夏涼会、秋には秋紅会、冬は冬雪会な」

「参加は自由の貴族のパーティーよ
黄龍様や八龍様、上級貴族に下位の地位の者が媚を売る場かしら」

コテン、と可愛らしく首を傾けた姉。言っている内容のせいで可愛さ減である

「姉上、ザックリした説明ですね…」

「いい？貴族の子はこういうパーティーで御披露目してパーティーデビューするのよ。
ウチも全員デビューは終わってるのだけど、基本年長者は皆、興味ないからデビュー後は余程じゃない限り出席しないわねえ」

レインの台詞に頷く年上面々

「確かに、美味しいご飯はあるけど。貴族の自慢話や腹の探り合い

なんて面倒ね

八龍様方に取り入る理由もないし、現状満足してるから、ウチで毎
回出るような奇特な人は両親含めいないし貴族同士で結婚する縛り
もないし、まあ縁遠いのよ

私も二回行ったきりでレインも二回でしょ？キリクに至っては一度
だけ」

「マナーは学ぶけど所詮それどまりだしなあ」

つまり現状満足

一家揃って貴族らしからぬ面々だ

しかし、貴族としての評価は高い
領主夫妻を筆頭に、長兄キリク・長女アリア・次女レインは文武両
道で実質業務の半分を受け持つ。

領地の整備や開発、治安向上、生活向上は田舎にあるまじく進んで
いるし、特に生活向上の面は現代知識を持ち込んだレイン中心に著
しい。

下手な領地より豊なのである。
おかげで領民からの支持も厚く、良心的な貴族で通っている

「クリスが赤龍様に会いたいなら、次の春桜会に出席する?」

「出席したいです!姉上!」

立ち上がって片手をあげてまで主張する弟に微笑む。

「なら私がパートナーでいいかしら?皆どうする?」

「良い機会だから私も出るわ」

「俺も出るか。アリア、パートナー務めてくれ」

「了解」

領地の仕事は終わらせないとね。せっかくだし王宮の近くの街で觀光したいし」

やる事は山積みだ。

「パーティー用の衣装作らないとねえ。クリス、後で採寸するわよ」

「レイン並に私も裁縫の腕があれば良かったわ。母さまに頼みましよう」

「明日には布屋に行かないといけないわね。母さまいつ御帰りになるんだった?」

「明日の朝一よ。」

此处で布屋を呼びつけるのではなく行くのがこの家の特徴である

「王宮に春桜会の出席届を出さないとな。」

「・・・しかし何時振りだ?王宮行くの。」

「覚えてないわ。下の子たちの誰かしらの付き添いで一回は余計に行ってるはずだけど。」

昔はパーティー行くの死ぬほど嫌だったもの。」

「あの頃はまだ領地整備が完全に整ってなかったせいで、何も無い土地でしかなかったからな。他の貴族からの嫌みはやたら飛んできたな。」

「ふん。今回は馬鹿にされる私ではなくってよー!!」

高らかに宣言した姉に苦笑し、レイン自身も良い思い出のないパーティを思い出す。

同時に、思い出すのはその嫌がらせの様な陰口叩かれたり、たまに面と向かって言われたりしたおかげで、シュレリアの土地改良に現代知識を持ちだすと決め事だ。

レインからしたら、まだまだヒョッコな醜い貴族に対し、レインの無いと思われた堪忍袋の緒が音を立てて切れたのだ。小童め、目にも物を見せつけてやる。と

普段おとなしい人間ほど、怒らしてはいけないものなのだ。

貴族と民とシュレイア家

唐突だが、シュレイア家について客観的にみると、それは民と貴族とでは印象が大きく違う事を記しておこう

貴族は、夜会やパーティーにめったに出席せず、貴族らしからぬ普段からの振る舞いを聞いては嘲った

貴族は、貴族として生まれたことがすでに選ばれたものという選民意識が働く

貴族とは何をおいても黄龍に絶対忠誠を誓い己の血を守ることこそ、仕事だと考える

故に黄龍の元に滅多に馳せ参じず、己の尊厳よりも自領の自治にあたるシュレイアの者は貴族として欠陥だと判断している

一方、シュレイアの民は他領の民に羨ましがられていた。

シュレイアの地は田舎にも関わらず上下水道の整備がされており、治安もいい。

特産物もあり、誰もが等しく医者にかかる事も出来る。

更に、領主もその一家も民に近く、要望も通り易い上に要望の上を行く整備を何時もするシュレイアは慕われない訳がなかった。

特に次女レインは民の中でかなり人気がある。彼女は親しみやすくまた知識人だった。

治安の向上の為に必要なのは職。と考えた彼女は彼女の知識から新たな雇用を生み出し仕事にあぶれる者がいなくなった。

更に新たな雇用で製造された商品は現在驚く勢いで販売されている。生産が追いつかないほどのだ

かといえば他の兄弟もかなりの有能だった。

長兄のキリクは主に実動隊での治安維持を指揮している。

田舎であるにもかかわらず、治安が良い理由の一つはこれだ。

実動隊とは言ってもそのメンバーの内実は二足草鞋の民だ。昼間働いている者は夜の巡回を

夜働いている者は昼の巡回を。

毎日交代で実施されおかげでこの10年程犯罪らしい犯罪も、山賊や盗賊の類もシュレイアの地を荒らしはしなかった。

長女のアリアは畜産牧畜の面で指揮をしている

今までは一定の区画の草を食べつくしたら次へ移動としていたのを、牧草を育て、常に同じ場所で飼うようレインが提案しアリアが指導した。レインは提案後口を出すことなく、アリアの溢れるほどの発想力で知識の無さはカバーされた

指導を経た御蔭で、裸の大地はなくなった。

更には餌の配合の指示をしたり、より美味しい製品の開発を行っているので、この地の産物は他領でかなりの人気だ

黄龍は民の声も貴族の声も聞く。

（一番は直接見て来る龍達の言葉だが）

故に今までシュレイアに関しては少し変わった貴族にんげんとしか思っていなかった。

しかし次女レインが赤龍を救ったと聞き、是が非でも会いたいと思っただ。

しかし黄龍自ら会いに行く事も、呼びつけるのも都合が悪かった。

そんな事をしてしまえばシュレイアを特別視しているのではないかと貴族達に訴えられるからである。

そんな面倒はごめんだ。貴族はしつこいのだ

どうしたものかと思案していれば、会いたいと思っていたレイン含め四人の兄弟が春桜会に出席するという旨の書が届いた。

これは好都合だと黄龍は酷く楽しげに笑んだ

「黄龍様？なにやら楽しそうですね」

「シヴァ、シュレイアの四人の兄弟が来ると書が来た」

「ホントですか？そりゃいい！赤龍の奴もそわそわしてましたし。」

「だが当日までは内密にしておこうと思っただが」

「それは面白そうですねえ」

にんまり笑う二人はまるで悪戯小僧のようであった

まだ見ぬ赤龍の恩人たちへ思いを馳せ、春桜会は近づいてきたのであった。

田舎領主の娘の唯一苦手なもの

「忘れてた…」

「姉上？」

「クリス、姉上は行けぬやもしれません」

「ええ！？」

クリスの驚愕の音が響いた

「呆れたわレイン。貴女、普段回りすぎる位回る頭は何処に行ったの…」

「レインは妙に抜けてるよな」

キリクとアリアに散々言われたレイン

返す言葉もないと小さくなる

彼ら礼装に身を包んだ四人の前には此方を伺う翼龍

「失念してたわ…王宮に行くには翼龍に乗らねばならなかったのに
！！」

肩を落とすレイン。

彼女は空を飛ぶのが大の苦手なのだ

翼龍という龍の中でも下位に位置する小型の龍は見た目蜥蜴に蝙蝠
のような翼を付けた生き物だ

王宮は標高高い山頂にあるため移動手段は翼龍に乗るしかない

しかし忘れているかもしれないが、レインは92歳で亡くなった筈
のお婆さんの魂を記憶を消さず転生している。

そうして忘れてはいけない。

レイン若かりし頃、日本は二次大戦中でその当時空を飛ぶと言えば戦闘機だが勿論兵士ではないレインは戦闘機に乗ることもなく、

また飛行機に比較的手頃に乗れるようになったのは割と最近

つまりレインは92年間一度として空を飛ぶ機会がなかったのだ

転生し、

92年間の記憶がなければ空を飛べることに憧れ喜び勇んで翼龍に乗ったろう

しかし92年は長い。その経験は、知識は、確実にレインを象る土台となった

92足す現在の年齢18

合計110歳

精神年齢お婆さんなレインはともじやないが今更空を飛びたいとは思えず、また恐怖しかないのだ

ちなみにレインは二度王宮を訪れているが二度とも幼さ幸いして母や父に抱き着き気絶するように眠って訪れた。という…精神年齢お

婆さんがすべきでない失態を犯したのだ

だがまだその時は幼く許された、が、今18のレインに出来よう筈もない

頭を抱えたレインに姉兄はため息を吐いた

きらびやかな世界（前書き）

シュレイアの末子視点

きらびやかな世界

王宮の天井は龍族の為に作られており非常に高い
そんな天井からは華美な装飾のシャンデリアが下がっており、天井
自体には美しい模様が描かれている

なんて華美な場所なのか、とクリスは酷く驚いた

「相変わらず、派手ね」

「見てみる彼方の貴族の衣装は。希少な宝石がふんだんにあしらわ
れている。あの衣装だけで領地5つ分の予算が組めるぞ」

姉と兄の台詞に驚く。そんなにですか

「ところで姉上、お身体の具合は如何ですか？」

王宮に来るのが覚えてないけど二回目の僕の為に苦手な翼竜に乗っ
たレイン姉上は顔が未だ未だ青白かったけれど、微笑んでくれた

「だらしないわよレイン」

「しかし姉上、私、本当に翼竜苦手なんです…眺めたり触ったりは
大丈夫なんですが」

「まあ宮に着いたのだ。黄龍様と八龍様がいらせられるには時間も
あるし、水でも飲んでなさい」

兄上が高そうなグラスに注がれた水を渡すのを見ながら、ちょっと

振りに見るだろう赤龍様に会えるのを楽しみにしていた

「いい加減視線が鬱陶しいわ」

「シュレイアは珍獣扱いだな」

不躰に見られる事に眉根を寄せる兄上と姉上だが、対してレイン姉上は気にしていない様子だ

「レインは空以外になると肝が据わってるのよ」

「レインは他領で産物の売買交渉したりするぐらいだからな。」

「姉上、空以外は余計ですわ」

「「事実だし」」

普段はしっかりしすぎる位のレイン姉上も長兄長女の前では形無しだ。

項垂れる姉上にクスクス笑えば、僕らが今いるパーティー会場の扉を護っていた人型護衛竜の方々が黄龍様と八龍様の訪れを声高らかに告げた

しかし、ざわめき扉に集まる人の群れと真逆に進む姉上達に首を傾げる

「あら、だって今回はあわよくば赤龍様に見えれば良いという目的ですもの。」

態々（ワザワザ）人だかりに埋没しなくても構わないじゃない。」

正論だ。どうせ龍の方々は扉を抜け上座の台座が高くなった場所に立たれるだろう。その時見ることに叶うはずだと兄上は仰った

そうこうしてる間に扉は開きざわめきは大きく歓声が聞こえる。
いらっしやったらしい

きらびやかな世界（後書き）

久々に更新しました。地震の被害が相当なものなのですが皆さん大丈夫でしょうか？

赤龍の驚愕成功した企み

扉が開かれ、床に敷かれた赤いカーペットを歩いているだろう赤龍様に何だか不思議な感じがする

別に赤龍様がハリウッドの映画俳優の様に赤いカーペットを歩くのが可笑しいのではなくて、直感だがきつと樹龍様とは違い華やかな場所が苦手な様に思うからだ

酷く臆病に私やシュレイアの家族に最初接してこられた彼の方は、誰にも、最初は己が恐ろしくはないのかと問うていらっしやった。

恐ろしくはないと皆口々に言えば目を見開き、泣きそうな顔をしていたのを覚えている。

あんなに優しい眼をした方の一体何処に恐怖を抱くのか此方が聞きたいものだ

「姉上、赤龍様こちらを見てビックリしてますよ!」

意識を戻しいつの間にか壇上に上がっている赤龍様達を見上げれば、確かにこちらを見て目を見開いている。零れそつだ

此方に来ようとされるのを樹龍様に制され、パーティーの開始を今か今かと待っている姿は、ちょっと可愛らしい

「赤龍様の衣装はいつそ何も付いてなくて清々しいわね」

「確かに余計な宝飾はあしらわれてないな。あれはあれで魅せる」
今後のシュレイアの産物に活かそうと他の龍の方々の衣装に注目しているのは最早職業病だ

「樹龍様はやっぱりきらびやかな衣装ね。くどくないのは流石だわ。」

「水龍様の衣装はとても綺麗だな。華やかさが全面に出ている。」

今度レースをあんな感じにあしらって市場に出すか？」

「レースを使うならむしろ少しが良いわ兄上。」

ふんだんに使えば値段は割高になるし、華美過ぎる衣装はすぐ飽きられるもの。ここはスカートの一部にあしらったり、襟や、ポケットの所に然り気無くあしらう方が断然良いわよ。
帰ったら構想を練らないと」

「とりあえず他領の方の衣装は見ときましょ。そろそろパーティー始まるし、多分赤龍様すぐ来るわよ」

アリア姉上の言う通り、パーティー開始の号令と共に赤龍様は早足で此方にやってくる。

そんな赤龍様を大袈裟に避ける貴族達にイライラしつつ…失礼口が滑ったわ
出迎える

「レイン、クリス、アリアにキリク…皆どうして…」

「クリスが赤龍様を見送れなかったのが残念だったと言つものからです。シュレイアを代表して私たちが」

ニコニコ笑うクリスや姉上、兄上と共に最上級の礼をすれば戸惑った顔は徐々に弛んでいく

「赤龍様、素敵な衣装ですね!!」

「そう、か？水龍や樹龍にはもつと派手にと言われたのだが」

「いえ、良く御似合いですよ赤龍様。無駄な宝飾がない分、貴方の見事な体軀を魅せる結果になっている。なあレイン」

「ええ赤龍様。大変御似合いですわ。」

余計なものが何一つない故に、赤龍様自体の魅力が存分に全面に出ておいでです」

「そう、だろうか？誰に言われるでもなく、お前達に言われる事が何よりうれしい。有難う。」

クリスとレインは似た意匠のタキシードとドレスだな。」

「はい!!レイン姉上が作ってくださったのです!!」

「なので似ているんですわ」

「そう、なのか！シュレイアの地にお邪魔していた時も思ったが、レインは手先が器用なのだな。」

良く似合っている。」

掛け値なしの褒め言葉に照れていればざわめきと共に、赤龍様の背後から樹龍様がいらっしやった

「御久し振りですシュレイア家の方々」

ニコリと戸惑われる事なく此方に挨拶される樹龍様を赤龍様は訝しんでいらっしやる

「どういうことだ樹龍。レイン達が来る事を知っていたのか」

「勿論。出席者は出席の旨を文に認め（したため）提出義務がある

んだよ？知らない訳ないじゃない。」

シレッと赤龍様におっしゃった樹龍様。

赤龍様の米神に青筋が浮いているのですが・・・大丈夫でしょうか？

「怒るな怒るな。言っておくが、赤龍に内緒にしておこうと最初に提案されたのは黄龍様だ」

「黄龍様までグルだったのか！！」

「グルとは酷い。ちょっと面白そうだと提案しただけだよ」

第三者の声は赤龍様と樹龍様の背後から。

この国のトップの黄龍様がいらっしゃり、慌てて姉達と共に最上級の礼をする

「固くならないで。貴女には感謝しているんだ。シュレイア家の次女、レイン殿。

貴女が救って下さったおかげで、我等の同胞ははらからこうして此処に居てくれている。

最近では自棄も起こさなくなってきたね。すべて君達のおかげだ。

心からの感謝を。シュレイアの家の者達よ」

この国のトップが、田舎領主の子供らに頭を下げた事は衝撃だったみたいで会場にどよめきが走る。

私はと言えばこの方が、私達の国の長なのだと、変に感慨深く思考の渦に沈んでいた。最も、それは内面の話で、外面としては長に頭を下げさせ続けるなんて言語道断。すぐに頭を上げてもらうように慌てていたのだが。

年をとってこの辺の使い道は上手くなったと我ながら思う。

それにしても、素晴らしく美系な顔だ。黄龍様も樹龍様も赤龍様も眼福だなあと呑気に考えていれば黄龍様と視線が交じった

「？」

「あー、先日、シヴァに菓子を持たせてくれたろう？私も食べさせて貰ったのだが、長く生きていてあのような美味しい菓子初めて食べ

た。

噂に違わず、良いものを創作してるのだな」

【噂？】

シュレイアの面々の声が被る

「知らないのか？元は畑作しかしていなかったシュレイアが、ここ10数年、大きな発展を遂げていると、商人を介して各地の平民達が噂している。

その最たる貢献者がシュレイアが誇る文武両道の長女・長兄・次女であり、特に新たな分野の開発・発展に尽力を尽くす次女の噂は実に、平民達の心を躍らせているようだ。」と。

下水道然り、新たな産物の作成然り、それに関する職の提供然り、
・
・
・

興味はあったが、中々そなた達は表舞台に出ないから、な」

「知ってました？兄上、姉上」

「知らないな」

「知らないわ」

「まさに、知らぬは当人ばかり。という事か」

注目的

樹龍様と黄龍様は他の貴族に挨拶に行かねばならないと言い、かなり嫌そうな赤龍様を引き摺って去られた

そうして残った俺達は会場中の視線の的だ

そりゃ滅多に出てこないシュレイア家の子供らが黄龍様や赤龍様、樹龍様と親しげにしていれば興味も持たれるだろうさ。おまけに黄龍様には頭まで下げられたし。

こんな状況下でクリスは居心地悪そうに。アリアは不快げにしているが、流石というかレインは我関せずとウェイターから酒を貰っている

「兄上、いりませんか？甘露ですわよ」

「甘露？」

「ウチが作っている酒ですわね。流石に最上級ですわ」

「頂くよ。それにしても甘露をいつの間に流通させてたんだ？」

「流通はしてませんわ。これは献上品です。父上が珍しいから献上したんでしょうね。今年の最上級100本の内、20本貰うよ、と先日仰ってましたから」

甘露は、他領に出回らないシュレイアの新たな産物だ

青い実を使って作るのだがレイン曰く梅のような実だから梅と字をつけたようだ。

おかげで名を知らぬ青い実は我が領では梅と定着した。

そうして<梅>を酒で漬けたものを《梅酒》と便宜上呼ぶことにした

《梅酒》は原液のままだと噎せる程の濃さだが、氷を入れたり水や炭酸水で割ると酷く芳醇な香りを醸し出す。

まだ流通出来る程の量は出来ず領内にのみ出荷しているのだ
商品名は＜梅酒＞ではいずれ他領に出した時通じないから、＜甘露＞となった。

レイン曰くこつちの方が美味しそうな響きでしょう？とのこと。

口に含んだ甘露は、その独特の香りを一気に口に広げ滑るように喉を下る

最上級と言っただけあつて実に美味かった。

それはこの酒を飲む他領の貴族達も感じたらしくウェイターに何の酒かと問うている。

「量産できれば飛ぶように売れるだろうな」

「あら、でも私は余り数作るつもりはないですよ？兄上」

「あらどうして？」

突然会話に入ってきたアリア。何時もの事だからそのまま会話は続く
「果実酒は梅だけ作るつもりがありませんからねえ。これからどんな果実は実りますし、毎年他の果実でも研究を重ねていて、今年位に試作品が出来るんですわ。」

当座それをおきたいし、シュレイアはまだ新作を出さなくても利益は大きいし、余り発表を続けても目新しさが無くなってしましますでしょう？」

一理あるな。と思う。アリアもこの回答で納得したらしい。

「あら、シュレイアの方々ではございませんか？」

ホホホとずっと此方を伺っていた人の群れからワザとらしく一人の老女がやってきた

「（誰だっ）」

「（姉上、兄上、本気で言ってますか？）」

御機嫌麗しゅう、トレーネ・ヴォルケ様」

レインは俺達と違い外交に行くから他領主の名を一致させているのかーと感心していれば、

12領地の領主ぐらい学んだではありませんか、と老女に気付かれぬようレインに言われた。

12領主というのはこの国エーティスを13に分け、1はここ、黄龍様が直接治める宮に

残りの12領地は（ひとつ例外として）この国の大貴族達が領主として治めている。

言わずもがな例外の一つは家こと中流のシュレイアだ。

・・・つまり眼前で笑う老女は大貴族それも西の大領地を治める領主と言う事になる。

「あら、私の名を知っていただけているの？」

「勿論ですとも。西の広大な領地を誇るヴォルケ様は世間知らずな私どもとて存じておりますわ」

「（私／俺知らなかったけど。）」「」

「（無視。）」

無視とは酷いな妹よ。

しかしヴォルケのバーさんが来てから他の領主まで、おやおやまあ、と近寄ってくる。

これだから嫌なんだよ

「シュレイアの方は夜会やパーティーは御嫌いなのかしら？滅多にいらせられないわね」

「ああ、このようなステキ（棒読み）なパーティーに私の様な田舎者は気後れしてしまうんですわ。」

棒読みだな妹よ

「ところで、先ほどは何故黄龍様に頭を下げられておいででしたの？」

「申し訳ございませんわ、この件に関しては口止めされてるのです」
「そう、なの。」

「ひょっとして赤龍様が関わっていらつしゃるのではなくて？先ほども随分仲良く喋っていたみたいですし」

今度は香水くさい女だ。余り近寄らないでほしい。動物に嫌われたらどうしてくれる

「赤龍様はとても当家に良くしてくださいますわ。」

黄龍様が口止めされているのに、勘ぐられてはこれから大変なのは？（黙れ）」

アリア、苛ついているなあ

「姉上、ぼくあのシチューが食べたいなあ」

「あら、申し訳ありませんわ皆様。末の弟は何分まだやんちゃな年ごろ故・・・せっかく御話しさせていただけたのに・・・申し訳ありません」

ぺこりと頭を下げ群衆から抜け出す。

「ナイス！クリス」

「うん。子供っぽく見えた？」

「十分及第点ね。ホントいやだわ貴族って。噂話好きだし人の秘密を土足で荒らそうとするし、ねちっこいし」

アリアのセリフに確かに、と頷き当分パーティー関連は遠慮しようと思心に誓った。

土竜と赤龍と田舎領主の娘

貴族の群衆から抜け出て、せっかくだからと料理を楽しむ事にする

流石は黄龍様主催と言うだけあって国中の料理が並ぶ

この国の主たる料理は洋食だ。レインにとっては和食特有の素材を生かした料理が懐かしい。勿論、郷愁にかられてばかりのレインでもないのだが。

ふと視線をテーブル中央に向ければ、ドンッと大皿に豪快に乗せられた猪の丸焼き。確か北の方の領地のご馳走だ。

レインは昔から野禽^{シレエ}…猪や鹿など獵で狩る動物…が苦手だ。食べないことは無いのだが、少なくともこの豪快な調理法では獣独特の臭みが強いし、丸焼きは見た目が少しキツイ

丸焼きを避けて別のコーナーに足を向けたレインに声が掛かった。

「食べないのか」

「あら…」機嫌麗しゅう、土竜様」

八龍が一、大地を司る土竜様は褐色の肌に焦げ茶色の瞳、黒髪の2mはあるつかという長身且つ筋肉質な方で、当然美形だ

我が領は八龍様と縁は殆ど無いが、

土竜様は豊穰な大地に変化した我が領を気に入っていらっしやるらしく時々ふらりと訪れになられる

「猪は嫌いか？レイン」

「牡丹鍋は好きなのですが、丸焼きは余り…」

「そうか。牡丹鍋とはなんだ？」

「猪の肉を薄くスライスして野菜と共に鍋で煮て食べるのですわ。臭みが余り気にならないんです」

「食ってみたいな。今度馳走してくれないか」

「しかと承りましたわ。」

あら、これは当領地のものですわね」

「チーズ…か？」

「チーズを白ワインで伸ばしたもので、チーズフォンデュと。茹でた野菜やパンを浸してお召し上がり下さいませ」

中々美味しゅう御座いますわ。と告げれば土竜様は躊躇いなく口に入れた

「旨いな」

「白ワインが合いますよ」

チーズフォンデュなんてこの世界に有りそうなのに、なかった。

日本で生きていた昔は、戦中戦後、チーズなんて中々食べられなかったものだ。

晩年になり漸くスライスチーズをパンの上に乗せ食べれるようになったのだ。あれは幸せ以外の何ものでも無かった。孫がご馳走してくれたチーズフォンデュを思いだし作成したが、我が領内でも大人

気である。

「土竜、何故レインといるんだ」

「赤龍、いや、元から俺は交流があつたのだ」

「そう、なのか？」

「彼女が幼い頃、シュレイアの大地の改良を行ったのだ。栄養不足気味だった大地は長い時間を掛けて、ゆっくり豊穡な大地に変化した。俺は大地を司る土竜。故にこの変化を喜びシュレイアには今も時折顔を出す。」

口数が余り多くないと思っていた土竜様だけれど、やはり同族の方には違うのかしら。

「（心配せずともレインをとりはしないさ）」

「Σ」

「？」

「レイン、俺はクリスやアリアに会ってくる。またな」

頭を一撫でした土竜様は去っていかれた。去り際赤龍様の肩を叩くのを忘れずに

「赤龍様は挨拶お済みになられたのですか？」

「あ。あ。元々我には形だけだしな。問題ない。」

「何故その様に卑下されるのかしら…赤龍様の悪い癖ですわね」

「しかし脅えられるのは気分が悪い。シュレイアの者達の様に己を真っ直ぐ見てくれる人間と話す方が楽しい。」

「まあ愛情には愛情を」

敵意には敵意を返すのが世の常ですわね。

けれど、シュレイア以外で気を楽しに持てる場を作らねば世界は狭い

ままですわ。」

レインには赤龍の気持ちがわかる。わかりつつ、それが駄目な事も理解しているのだ。

「視野が狭いままでは勿体ないではありませんか。せつかく生きているのです。楽しんでナンボですわよ」

少し口調が砕けてしまったと思いつつ、此方を見る赤龍に、ニコニコ笑い掛ける

日本に生き死ねればそれで良かった。

旅行だつて国内でいい。幾らでも見る場所はある。そんな、かつての私を連れ出したのは初めは戦争で足をやられ、片手に杖をつく夫だった

米国は行く気になれず、トルコに行った。勿論、戦後復興後だ…何故トルコか、世界三大料理を食べてみたいしその文化を感じて見たかったのだ

日本とは異なる街並みに胸躍り、優しい人々に胸温まる

世界は広がった。

勿論、赤龍様とは意味が異なるけれど、悲しみだけでこの国を見て欲しくない。私が生を受けた新しい国はとても美しいのだ。その眼にしかと焼き付けて欲しいのだ

土竜と赤龍と田舎領主の娘（後書き）

今一土竜絡んでない…

閑話（前書き）

土竜の漢字の読みに関する問い合わせがちらほら・・・読み方はくつちりゆうゝ。もちろん、漢字を土龍ではなく土竜にしたのは、管理人の遊び心です。するーして下さいませ

閑話

春桜会から戻って、何処までも続く長閑な光景に、ここがシュレイアの在るべき場所なのだと四人が四人共に認識した。

自分達に必要なのは、きらびやかな衣装でも、身を飾る宝飾でも跪く下僕でもない。自分達を慕い、頼ってくれる数多の領民であり、長閑な大地だ

自身を育んでくれた大地こそ在るべき場所。要約すれば暫く呼び出しが無い限りはパーティー等は御免という…彼等らしいが

戻ってすぐ、アリアはレースをあしらった庶民にも気軽に着れる衣装の作製に入り、レインは兼ねてから待ち兼ねていた果実の収穫の後、果実酒製造に入った。キリクは最近鍛え出したクリスや他の弟達と鍛練する

元の生活に戻ったのだ。

「杏子酒、花梨酒、桃のお酒も出来るかしらね？折角ですから色々試してみないと。」

梅酒はレイン自身が日本で生きていた頃、毎年の様に作っていた。梅干しも漬けていて、此方でも試した所、父母とアリア、クリスが好んだ。キリクや他の兄弟は酸っぱいのが苦手な様で代わりに砂糖漬けを作れば、此方は皆気に入ってくれた。

梅の砂糖漬けと梅干しはシュレイアの市場に出回り、最近では専用農家も現れている。新たな産物の候補になるだろう。

更にレインは近頃というか此处数年、菓子作りにも精を出しており、洋菓子もだが小豆に近い植物を見つけてからは和菓子作りに精を出している。

恐らく米と思われる植物の栽培は幾つかの試験場を作って今年から開始した。同じ母が見つけて来てくれた植物の中には餅米に似た植物もあつたから、今年の出来次第では本格的に和菓子が出来るかも知れない。

更にレインが執念…と言って良いだろう。

茶の栽培は既に行っている。

元々、英国のようにアフターヌーンティーの習慣はあつたのだが、茶というには味気なく、レインにとって茶と認めるには少々、前世の茶への執着といえいいのか、舌に肥えてきた日本人らしく妥協したくなかつたのだ。

日本人として92年も生きたのだ。緑茶が無いとやはり嫌だ

もつとも、他領では今までの茶（仮）↑やはり認めたくない。
故に、先日来訪した赤龍と樹龍には一般的な茶を出したが、本意ではない。

土竜はシュレイア家にふらりとではあるが訪れて長いので、今では緑茶を好んで飲む。

西洋系の顔立ちの美丈夫の土竜が和やかに緑茶を飲む様は、中々癒される。ここだけの話だが

同じように、昔懐かしい和食を再現するために大豆はあるので（豆は主食にもなるので豊富にあるのだ。）醤油・味噌を作り、自身の利用する程度にはすでに完成されており時折食卓に並ぶ。

さらに米が上手く出来る様になったら日本酒も作ってみたい。

そんなレインのひそかな野望を知るものは、現時点でもちろんない。

閑話（後書き）

お気に入りや感想、有難うございます。励みにさせていただいております

いまさら登場人物（前書き）

別名管理人の為の1p

いまさら登場人物

*レインⅡシュレイア（18歳）ただし左記の年齢は肉体年齢であり、精神での年齢は異なる。

かつては戦中を生きた経験もある。平成に変わり、西暦が2000年となった後、92歳で世を去るも、三途の川はすつ飛ばし、シュレイア家三番目の子供で次女に生まれる。生まれた時から精神年齢が老成しているため、当初は両親共に戸惑うも、シュレイアという特殊な貴族の両親は彼女が三歳の頃、直接説明を聞き、すつかり受け入れた。又、彼女の異質性により他の兄弟、特に上の二人の兄と姉の成長（内面の）を促進。シュレイアの才女、才児が世に生まれる結果になった。

性格は温厚篤実。また前世現世共に培われた経験と知識を余すことなく自領のために扱うことに躊躇いは最早なし。ちなみにかつては前世知識を使うことに躊躇したが、初の披露目の宴でキレてからは一切の躊躇いなし。

結構ざつくりした所もある。よく言えば思い切りがいい。悪く言えば大雑把。

自領の民から好かれており、自身も民を愛してやまない。領地の仕事、特に座して行うものは8割方2話現在で両親から引継ぎ、こなしている。

好きなものは穏やかな生活
嫌いなものは悪徳官僚の様な貴族。

容姿は、焦げ茶の腰まである髪をポニーテールにして、基本的にはツナギを身に纏う。瞳も焦げ茶。化粧気はマナーに違反しない程度。身長は155cm

趣味は日本食作り。ここに味噌や醤油を作ることにも含まれる。
日本人にありがちの、塩分大好き娘

* 赤龍Ⅱ火龍（2300歳）・・・人名なし

雄龍

龍の姿はまさに真紅。焰を司る、純粋な戦闘能力では黄龍をも上回る。

持った力が強力すぎて、生まれて間もなく母龍に打ち捨てられた。強すぎて同属の八龍と黄龍を除いた他の龍族の者たちにも畏怖され続けた。親愛、友愛など、愛情を知らない。

簡単に逝く事も出来ないため、何時しか長き生に、強すぎる己に嘆き戦では特攻に走るようになる。

人型では紅い髪を三つ編みにしている。長さは三つ編みにして1m程。髪Ⅱ鬢たてがみ。瞳はピジョン・ブラッド。身長は八龍の中で最も高く2m。ガタイも良い。

八龍の中では一番樹龍と仲が良いが決して他の八龍と仲が悪いわけではない。あくまでも一番。

★黄龍Ⅱ皇龍（5000歳）龍族最年長・・・人名ジルヴァーン
雄龍

この世の龍を統べる、西の端の国エーティスの王

総合的な能力が高い。長き歴史を生きるだけあってその知識は豊富で、長命な龍族の中でもっとも永く生きている。赤龍含め、特に八龍を大切に思っている。

人を蔑視することなく、むしろその龍族からすれば遥かに短命にも関わらず、短き生涯を煌く様に駆ける様は尊敬に値するとも思っている。

人型は180cm。髪Ⅱ鬣の色は金。瞳は瑠璃色。体格もそれなりに良い。

★緑龍Ⅱ樹龍（2500歳）龍族の中で黄龍に次いで永く生きている。・・・人名シヴァ

雄龍

緑と再生を司る。黄龍の側近のようなもの。

甘いものがかなり好き。紅茶に砂糖を10杯入れるほど。

赤龍は樹龍にとって一番仲が良く、年も近いので大切。

赤龍の今後を変える可能性を多大に持つレインには是非赤龍の番になってほしいと考えている。

戦闘においては後方支援の策士

人型は177cm。髪Ⅱ鬣の色は深い緑。瞳はペリドット。体格はどちらかというと痩せている。戦闘向きの体格ではない

*青龍Ⅱ水龍（１０００歳）・・・人名アルテナ
雌龍

水と癒しを司る。面倒見の良いお姉さん。

お酒が好きでワク。

面倒見は良いが、かなり不器用。覆えて損は無いとはじめた料理では漫画のように爆発が起こった。

器用な人や龍が大変うらやましい。戦闘においては後方支援

人型は１６８ｃｍ。深い蒼の緩くウェーブした髪Ⅱ鬘をバレッタで止めている。ぼん、きゅ、ぼん、なグラマラスなお姉さま。

*金竜Ⅱ鉾竜（１２００歳）・・・人名無し

雄龍

鉾石を司る。堅く真面目な性格で他龍からの信頼も厚い。

手先が器用で八龍なのに日曜大工が趣味。

口下手且つ人見知りだが親しくなれば他と変わらない。

人型は１９０ｃｍのガッチリした体格。体格だけを見れば八龍一。

戦闘においては前線向き。

髪Ⅱ鬘は銅色。瞳も銅色。

*土竜Ⅱ地竜（２０００歳）・・・人名無し

雄龍

大地を司る。八龍の中では赤龍を抑えて最もシュレイアと縁を結んでいる。

レインの姉のエリアが気に入っている。勿論、シュレイアの土地改

良を行ったレインも、八龍と知っても媚びず、敬意を表すシュレイアの者は皆気に入っている。

レインの作る和食や他の料理、緑茶が気に入っている
戦闘においては守備

人型は196cm筋肉質。褐色の肌、焦げ茶の瞳、髪Ⅱ鬘は黒。

* 白龍Ⅱ風龍（400歳）・・・人名無し
雄龍

風を司る。八龍最年少。あどけないが仲間思い。
龍族でいえば子供の年齢に当たる為、まだまだ幼さ抜けない。
雷竜の腕によく抱えられている。
戦闘は中距離、どちらかといえば前線補助向き。

人型は130cm。髪Ⅱ鬘は白で瞳は水晶のよう。

* 銀竜Ⅱ雷竜（1800歳）・・・人名無し
雄龍

雷を司る。白龍のよき保護者。
小動物が好き。

与えられた宮で読書をしている時間が至福の時。本は基本的に雑食で、評論から御伽噺までなんでも御座れ。レインの語る物語を聞くのが最近の楽しみ。
戦闘は前線攻型。

人型は188cm。筋肉質。髪Ⅱ鬘は銀色。瞳はトルマリンの中でもルベライトの様な色。

＊蒼竜Ⅱ氷竜（８００歳）・・・人名無し
雌龍

氷を司る。同系統で同姓の為アルテナと共にいることが多い。

直情型で怒ったらすぐに力が発現し辺りを吹雪かせるから玉にキズ自身もその点、反省しており将来は淑やかな女性を目指すらしい。

戦闘においては中距離攻型

容姿は１４４ｃｍと小柄で髪Ⅱ鬘は水色。ツインテールにしている。
瞳はアクアマリンのような色。

シュレイア家

当主セルゲイ・シュレイア（４８歳）

穏やかで懐の深い人物。シュレイアは貴族の中では中流に位置するが上流貴族に媚びることなく日々領地領民の為に働いている。好きなものは領民と領地と家族。

貴族の中では変わり者と称されている

当主妻フェリス・シュレイア（４６歳）

セルゲイとは恋愛結婚という貴族の中では珍しく相思相愛の仲。家族仲も頗る良好。

セルゲイと同じく懐が深い。マナーには煩いが、それは最低限それくらい学ばせるのが親の務めと思っているから。領地領民家族大好きな奥方様。

長男キリク・シュレイア（24歳）

シュレイア家長男で文武両道。しかし片寄りがあるとすれば武。領地の治安維持向上の為領民と協力して動いている。将来的に領主はレインがこなし、自身はサポートに回るつもりでいる。

日進月歩、を頭に、日々領地領民に関して考えている。

嫁をもらう適齢はすでに超えているが、自身、嫁を貰う器量に至っていないと思っており、その内恋愛結婚するつもりだ。他領の貴族に嫌悪感を持っている。

長女アリア・シュレイア（21歳）

シュレイア家長女で文武両道。しかし片寄りがあるとすれば文。領地の畜産・牧畜の生産品質向上を目指し領民と動いている。姉御肌。将来的にはキリクと共にレインのサポートに回るつもりでいる。

嫁に行く適齢期は過ぎているが、一生独り身でも兄弟多いし問題ないと思っている。自身に結婚願望は無し。仕事に生きるキャリア・ウーマンといった感じ。

次女レイン・シュレイア（18歳）このp最上部。

次男アルフォード・シュレイア（16歳）

シュレイア家第四子で三つ子の兄。領地領民家族大好きで、貴族の枠に掟われることなく日々努力し成長している。しっかり者で、キリクと共に実動隊で治安維持に動く。

三男ステイブ・シュレイア（16歳）

シュレイア家第五子で三つ子の真ん中。領地領民家族大好きで、語学が得意。医術も学んでいて、領民の医者弟子として働いている。穏やかな性格である。

四男サデイク・シュレイア（16歳）

シュレイア家第六子で三つ子の一番下。領地領民家族大好きで土いじりが大好き。普段はレインやアリアと共により効率良く、品質良い作物が出来ないか研究している。活発な性格

三女フェリシア・シュレイア（14歳）

シュレイア家第七子でシュレイア家の子供の中で唯一婚約者がいる。ちなみに貴族ではない。

淑やかではあるが家事が好きな（貴族は普通しない）所はやはりシュレイア家の血。

ちなみに領地領民家族大好き。

四女マリア・シュレイア（11歳）

シュレイア家第八子。領地領民家族大好きで、いつかアリアのような姉御肌になりたいと思っている。

馬が好きで厩に入り浸っている。レインのように日常的にツナギを着ている。

五男クリス・シュレイア（9歳）

シュレイア家第九子。領地領民家族大好きで最近では赤龍に憧れキリクに武術を習いだした。

一回目の記憶はないが二回目の春桜会にて貴族を目の当たりにし衝撃を受けた。

そうして自身がシュレイアに生まれたことに改めて感謝した。

いまさら登場人物（後書き）

時々更新します

田舎領主の娘と商人

「む・・・・・・・・・・・・・・・・これで如何でしょうか？」

「隣国有数の商家の貴方の、提示する額とは思えませんわ」

「これは手厳しいな・・・・では、これで」

「お話にならないわ」

「むむ・・・・・・・・・・」

エーティスの隣国、ローランという国の中でも有数の商人、ロナウド・トートスは、眼前で悠然と微笑むシュレイア家の長女に眉尻を下げている。

いかにも困ったという風だが長女に効くものではない。

取引の材料はシュレイアの次女であり、仕事内容で見ると実質この領主代理を務めるレイン嬢の作成した

<梅の塩漬け>

<梅の蜂蜜漬け>

である。ローランは世界でも有数の暑い国であり、毎年、一年で最も暑い大暑の月になると倒れる者ばかりでなく、死人まで出るほど暑さは深刻な敵である。

ロナウドは勿論、ローラン国民全員が暑さ対策を身に付けたいという思いは積年のモノである。

そんな折、龍の支配する国、エーティスの中で、最も近接するシュレイアの地に魔法の実があるという噂をロナウドは聞きつけた

シュレイアという領地は、ローランの中でもよく耳にする土地だ。

とはいえ話題に上がるのは二種類でその領地から輸出される商品と、その領地を治めるシュレイア家の傑物三兄弟のことだが。

その噂に名高い傑物の内の一人、シュレイア家の長女が商談に当たってくれた。

本来は外交などの担当はもっぱら最も優秀と名高い次女が行うのだが、あいにく次女は一週間ほど前から自室に閉じこもってなにやら開発をしているらしい。

実に惜しいことであるが、それでも傑物の内の長女に会える事は喜ばしいことだと、望んだ商談の席で、長女の実力を鑑みる結果となった。

折れない、絶やさない、見せない

それがロナウドから見た長女の印象だ。

決して商談において、相手を優位に立たせることなく、自身の望む最低限の事に関して一切の譲歩無く折れない。

悠然と、時には妖艶な笑みを絶やすことなく、表情により商談の展開が読めない

切り札どころか、カードの枚数すら勘付かせず、見せない

これが長女、アリア・シュレイア
なんという女性なのか

「これで、如何でしょう」

「……まあ良いかしら。では貴方を介して貴国に優先して輸出するわね。」

「よろしくお願いいたします」

「此方としても、隣国の商人と繋がり持てて嬉しいわ。基本的には領地から出ることは無いの。」

これから他の産物も交易を望むのでしたら、次女がお相手するかと
思いますわ。」

「次女殿、ですか」

「今は次の商品開発で部屋に籠もってるのだけど、この梅干もあの子が作ったのよ。」

シュレイアでは既に専用農家もいるくらいだから、貴方を介して隣国に輸出しても問題ない数はあるわね。シュレイアの土地も暑くないわけではないのだけど、ローランより遥かにマシだから、そこまで必要ではないのよね。必要に駆られて作っているのではなく、彼女いわく食べたいから作るみたいで」

「左様で御座いますか……」

「その梅干、なんだったか忘れちゃったけど、疲労回復に良い成分が入っているの。あと、勿論塩もね。暑くて汗をかくと汗と共に塩分が体外に出てしまうから、梅干で補給するといいらしいわ。」

蜂蜜も高エネルギーだから体力回復にいいかもしれないわね。」

「そう、のですか……お詳しいですね」

「私ではなく妹がね。色々知ってて不思議なのだけど、あの子はそういう子だと思ってしまつと、納得しちゃうのよね。得た物も多いし、何より私たちの家族だから信頼しているのよ」

それまで妖艶さすら垣間見えていた彼女の、柔らかな微笑を見て、そこにシュレイアの実力を垣間見たような、そんな気がした

田舎領主の娘と商人（後書き）

お久しぶりです。新しい生活環境でPCも携帯も電波が中々届かず・

更新できる場所（電波のある場所）を発見したのでこれからそこで更新に努めたいと思います

土竜の癒しの時間（前書き）

シュレイア家兄弟大集合の図

土竜の癒しの時間

春桜会が終わって二ヶ月が過ぎ、シュレイアの地では茶の収穫が最盛期を迎えている。

レインの拘りから始まった茶の栽培は此处近年で見慣れた光景となっており

とてもじやないがこの地が、かつて、ただの少し痩せた農耕地だったとは思えないほど、美しい光景が広がる

茶畑のみならず、水面に空の蒼を映し美しい碧の揺れる水田も、牧草地で和やかに欠伸する馬達家畜、整備された上下水道により綺麗になった川や池、湖

この光景をシュレイアの領主一家同様に、楽しみにしているものがある。

大地を司る土竜^{じちゅう}である。

彼は、大地を司るだけあって、他の龍族では聞くことの叶わない声を聞く事が出来る。

豊穡の大地は歓喜しそこに生きる数多の生物は大地に感謝する

他の領地では聞かない、土竜にとって何より喜ばしい声だ

「今年から試験的に始めたコメという植物か？これは」

「ええそうですわ土竜様。（記憶に差異無く）今のところ順調に育っていますわ」

ニコリと笑うシュレイア家の次女、レインは相変わらずくつなぎ>という作業効率性の高い服を身に纏っている。

年頃の女性なのだがレインもアリアも貴族の女性にありがちなくお洒落>というものよりもく機能性>を重視するのだから本当に珍しい。

近年ではレインやアリアを尊敬する第四女のマリアもくつなぎ>を着るようになったとも聞く。

珍しいが、好感が持てるのも確かだ。

「レイン、茶を飲みたいんだが良いか？」

「勿論です。紅茶より緑茶のほうが・・・？」

「うん、頼む。外で飲むか？」

「本日は天気もいいですし外に莫座を引きましょうか。」

茶菓子は、以前申し上げました小豆を使った菓子の試作品が出来ましたのでそれをお持ちしましょう」

シュレイア家を訪れると、視察の後は領主一家と茶をするのが数年前からの習慣になっている。

レインの作る新作菓子も、此处でしか流通していない茶を飲むのもとても楽しみだ

「あら土竜様、視察にいらしたんですね。」

「もうそんな時期か」

「アリアにキリク、久しいな。春桜会ぶりではないか？」

「「お久しぶりです！土竜様！！！」」

「三つ子も久しいな。それぞれ励んでいるか？このあたりでは追いはぎも夜盗も出るとは聞かないが・・・アルフォードもキリクも重々気を付けるように。」

ステイブは医師の勉強中だったな。どうだ？難しかりう」

「遣り甲斐はともあります！！」

「何よりだな。」

「レインと共に最近は研究室に籠っているんだって？？サディク。

活発なお前が珍しい。余り籠って頭を使っただけだと禿げるぞ」

「適度には出てますよ！！土竜様！！禿げませんよ！！もし禿げたら毛生え薬開発します！！」

「らしい選択だな。程々に、な。」

「分かつてはいるんですが、やっぱりレイン姉上を目指すとするとそれ相応に努力しないと駄目ですし・・・まあこれから頑張ります！！」

「その意気だな。世にシュレイア家の傑物といわれる三兄弟を兄姉に持つのだ。良い見本だろう。学ぶことをしっかり学んで生かしていけ。」

「「傑物って」」

「自覚なしか？キリク、アリア、レイン

今では国内より周辺諸国のほうがその異名を謳う。」

国内ではどちらかといえばく変わり者の領主シュレイア>のほうを耳にする。

対して外国ではその外交手腕と流通している珍しい商品からそれを生み出す三兄弟への評価が高く知れ渡っている。大地は何処までも続く為風龍と並んで土竜は情報通である。

最近交易を始めた隣国ローランでも上々の評判だ

「やっぱり兄上も姉上も素晴らしい方ですね！！！」

「本当にな。クリスたちもしっかり姉と兄を助けるのだよ。」

「はい！！！」

元気な声がシュレイアの地に響いた

赤龍の心

赤龍の本質は火龍であり、有事の際には戦場の最前線で戦闘を行う攻撃型の龍である

そのことを国の誰もが知っており、知っているからこそ国の誰もが彼を厭う

平凡な生活を営む民にとって豊穡の力を持つ樹龍や土竜は崇拜し、一歩間違えれば自国すら巻き込みうる強大な力の持ち主であり、血に塗れる赤龍は、崇拜よりも恐怖が表立つのであった

戦があるたびに民の畏怖の眼差し、恐怖に引きつる声が火龍に届く

その眼差しも、その声も、火龍を縛る目に見えない鎖となる

―好きで赤龍になったわけではないのに―

・好きで力を持っているわけではないのに・

―誰が好んで血に塗れ、負の感情に晒されるか……!! 我は
っ―

暗い世界、血の湖に立つ赤龍を指差す数多の人影

己の歩んできた道そのものだ

暗いくらい世界に沈み込んで二度と浮上しなければいいとさえ、思った

- 貴方のどこが怖いの -

―とても優しい瞳をしているじゃない。―

優しい声が響いた

数千年生きた中で初めて我を受け入れてくれた女性の声

―そんなに恐る恐る近寄らずとも私達は貴方様を取って食いませぬよ―

―赤龍様のようにお強ければ、姉上や兄上達を護って、家族を護って、領民を護れますね・・・!!―

どうやって強くなったのですか――

――是非またシュレイアにいらしてくださいませ。レイン姉上の作る菓子は絶品ですよ！――

そして恐れる我的手を引いて開いた世界を見せてくれたシュレイアの家族

会いたい、そう思う

春桜会以来会っていない優しい、暖かい家族の、あの娘の元に行きたい

「朝、か……途中までは酷い夢、だったな」

暗い世界、血の池に立つ己

しかしいつの間にか血の池は柔らかな草原に変わり暗い空はあの日見た何処までも続くような青空に変わっていた

「シュレイア、か

会いに行つて、いいだろうか

許されるであろつか」

もし一瞬でも嫌な顔をされたら、立ち直れない自信がある

初めて己を見てくれた女性とその家族だ

今の己の心の支えだ

もし、もし、もし……不安は尽くことが無い

「そのように不安に思うなら、一緒に行つてやろつか？」

「……毎度のことで言うのもなんだが、樹龍、何で毎度バルコニーから侵入するんだ」

「何処から入っても一緒だろう？それより、俺も行こうか？レイン嬢の菓子も食べたいし」

「・・・・・・・・・・却下だ。」

「葛藤したなあ・・・・・・・・・・まあいいさ。背中を押してやっただから、土産貰ってこいよ」

「馬鹿め」

背中を押したのか、それとも遣いを頼まれたのか今一分からないが、切欠として、行こうかと思った

言い方はどうあれ樹龍には一応感謝しておく。

再会く上く(前書き)

お久しぶりです

再会<上>

訪れた日は、丁度シュレイアの地で毎年行われる豊穡の祭りの初日だったらしく

他の町とを繋ぐ街道は綺麗にされ、町中が華やかな装いとなり、道行く民もまた、華やかな衣装を身に纏い手を取り合い歌い、踊り、笑っていた

赤龍はその祭りの様子に臆した。

レインとシュレイア家を訪ねてみたは良いが、この様に明るく笑顔に満ち溢れた今日という日につくづく破滅を司り恐怖を呼ぶ自身は似合わない。

ここは退散するしかなさそうだと、一步後退した

「赤龍様？」

「！…キリク、か」

祭りの警護をしているのか何時もより動きやすさを、より重視した衣装に身を包んだキリクは、少し驚いたように赤龍を見つめ一礼する

「春桜会以来で御座いますね。ご健勝そうで何より。
レインでしたらアリアと共に西の広場にありますよ。ご案内致します
しょう」

ニコリと笑って赤龍を先導する

つい、付いて行っていることに我に帰り赤龍はキリクの名を呼び、
呼び止めた

「すまぬがキリク、我は帰ろうと、」

「せっかくいらしたのに、お帰りになるのですか？
何故です？まさか我が領地の者が何か気に触る事を？」

キリクの台詞に首をふる

シュレイアの領民は此方に気付いて視線をチラチラ送ってきてはい
るものの、他領とは違い怯えは見えない。

以前大怪我を負ってシュレイアの地に落ちた時は他領程ではないも
の、あったのに。今は欠片も不快な視線がないことに驚いている

「では何故？」

「この様に華やかな場に我は似合わぬ。場違い甚だしい。時を改め

伺って構わぬだろうか」

「何時いらしても誠心誠意歓迎致します。勿論今日も。」

赤龍様、貴方は人間に遠慮し過ぎです。楽しい祭りなのですから、赤龍様も楽しんで下さい。

なあ？レイン」

「！」

「左様で御座いますわ赤龍様。今日は一年に一度の豊穰の祭り。赤龍様始めとする八龍様への感謝の日でもあるのです。いわば主役。宜しければ私が案内致しますわ。」

鮮やかに笑うレイン

普段身に纏う衣服（「ツナギ」とは違い、薄桃色のシュレイアの地伝統の衣装を身に纏っている。化粧もし、髪も複雑に結っていてとても美しかった。

「馬子にも衣装で御座いましょう？恥ずかしいですわ」

「いや、よく、似合っている。」

「あら、ふふ…有り難うございますわ」

顔立ちは確かに平凡なのだろう。赤龍とて永く生きている。美しい女など掃いて捨てるほど見てきた。

だが、何故かレインには他の女とは違う何かがある気がした。心臓も脈動し、戦闘でもないのに身体が強ばる

果たしてこの覚えのない感覚は何なのだろうか

赤龍は自身に自問自答するも答えは返って来なかった

再会<中>(前書き)

ちよつと分けてみました。赤龍視点

再会<中>

レインと歩いているとそこかしこの領民が笑顔で挨拶をしていく

我にもまた、一人が挨拶をしてきたのを皮切りに老若男女問わず、簡易ではあるものの礼をし、笑顔を見せる

そんな他領では、むしろ自身の宮ですらない反応に戸惑う

オロオロと、まるで幼子のような我

反応を返さなくてはと思うのに、自分の口が、自分のものではないように堅く引き締まる

そんな我を見かねたレインが、私の背を押すかのように、微笑んだ大丈夫だと、母が子供に促すようなその笑みが、我に一步を踏み出させた

少し震える手が、礼をする人の子の髪をなぞる

子供は顔を上げ我を見て、クリス達の様に<くへらあつ>と笑ったのだ

その瞬間、我は掬い出されたような気がした

かつて見た夢のような暗い世界から・・・明るい世界に出たわけではない

けれど真つ暗な世界でもない

レインが、シュレイアの一家が我を浮上させ

シュレイアの人の子が、また、ほんの少し浮上させてくれた

頬を伝う、火龍にあるまじき雫

産声を上げて早数千年

我は生まれなおしたような錯覚に陥った

ああ

ああ………本当に、シュレイアの者は我をどれほど救うのか

ただただ、シュレイアに、レインに、感謝する言葉ばかりが浮かび
頭を占める

泣いた我を気遣うレインの手が私の背をなぞる

衝動的に、その腕を引っ張りまるで子が母に縋る様に抱きしめた

レインは、驚いたように声を上げながらも拒絶することなく、そっ
と背を優しく撫でた

貴女はなんて無意識に心を救うのだろうか

遠い昔生まれてすぐに失ったものを惜しみなく与えてくれる貴女は、
一体何故そんなに・・・

自問はしても答えはなくていいと思う

きっと、レイン・シュレイアとはそんな人間なのだ

言葉でも、物でも量りきることの出来ぬ存在

生まれて初めての感情を与えてくれた人間のか弱き娘

もし神という者が、真存在するのならば、何度も死ねないことを恨み、呪詛を吐いた事を心から謝ろう

この稀有なる心の持ち主達に合わせてくれて本当に有難う

再会<中>(後書き)

まだ親愛の域を出ていない・・・筈

再会<下>(前書き)

更新再会して続々メッセージが・・・ありがとうございます！

再会<下>

不器用に加減された腕の中で、子供のようにシクシク泣く赤龍様に戸惑ったのは確かだ

背をなぞれば腕の力が増す

まるで幼子が母に縋るようだと赤龍様にバレない様に微笑んだ

此方を伺う領民に、アイコンタクトすれば察したように私と赤龍様を避けていつてくれた。

察しの良い領民でよかった。

結構な時間が経ったようにも、余り経ってないようにも思える
赤龍様はそろりと腕から力を抜いて申し訳なさそうに謝ってきた

「気になさらないで下さいませ。

・・・・・・もう、大丈夫でございますか??」

「ああ。有難う」

ゆるりと笑う赤龍様にこちらでも微笑んで返す

「赤龍様、祭りを楽しみましょう」

「・・・・・・・・・・ああ」

葛藤は、自分が居て良いのかというもののなか。それでも頷いていただけだから、少しは解って頂けたのか。

赤龍様、貴方の存在をどれほどの人間が厭おうとも、我らシュレイアの一族は、貴方を本当に大切に思っておりますよ

強く気高く、そして心優しい紅の龍様くれないのりゅう

<sideレイン終了>

ゆっくり、ゆっくりと祭囃子の中を歩く赤龍とレイン

シュレイアの祭りはレインが昔の記憶を掘り起こして作った日本のような屋台が並ぶ

他の領にはない祭りの様相に、売っているものも珍しい。

赤龍の視線は忙しく周囲に向けられる。最も、それは赤龍のみでなく、他領からやってきた商人達もまた物珍しそうにうるちよると

しているが。

「他領は、作物の品評会をして優秀者を表彰し、踊るだけと聞いたが、ここは沢山の物が売り買いされているのだな」

「昔の豊穰祭はそうだったと聞いておりますが、シュレイアが領主となつてからは徐々に変容し、今の形に落ち着いたのは、私の代ですわ。」

「なんでも、せっかくの豊穰祭、子供からご老人まで楽しめるほうが良いじゃない。と何代か前のシュレイア当主が言ったそうで。」

「その当主は中々破天荒だったのだな」

「そう、思いますわ。最も、今の領主一家も似たような破天荒さを持っていると民からは言われますが」

くすくす笑うレインに、赤龍も頬を緩める

「ああ！！！！赤龍様！！！」

「こらクリス、叫ばない。」

「祭りは如何です？赤龍様」

「クリス、元気そうだな。

・・・とても、良い時間を過ごしている。キリク、そなたが我を見つけ、声を掛けてくれなかったら、一生祭りを楽しむ事はなかったろう。有難う。」

赤龍の台詞にクリスは元気よく返事をして、キリクは嬉しそうに軽く一礼をする

「赤龍様！！飴は召し上がりましたか！！？？僕、りんごの飴が好きなんです！！」

「まだ食べていないな。案内してくれるか？」

「はい！！えつとですね、イチゴもブドウもありますよ！！全部美味しいです！！」

前をクリスと赤龍が歩き、少し離れてレインとキリクが歩く

【レイン、最近リオルの国がキナ臭い】

【・・・・・・リオルとは真逆にあるから大事無いとは思っけれど、暫く注意しなければならいわね。念のため食料は備蓄量を増やしておきましょう。】

耳の良い赤龍に届いた二人の会話。

しかし何を言っているのかわからない。少なくともエーティスの言語ではなかった

「？」

「？・・・あ、兄様達がしゃべってるのは英語なんだって。僕もまだわからないや」

「英語？」

「うん。知られたくないことを喋る時に上の兄様達だけ使うの。」

「知られたくないこと・・・？」

「例えばね、シュレイアの作物は品種がいりょーされてるから、それをスパイしている他国の人間にバレたくないから英語を使うんだって。」

「そうなのか・・・。」

「うん。秘密の言葉なんて凄いやねえ。僕も使えるようになりたいなあ」

「大きくなったら教えてもらえるさ」

「うん！約束しているんだよ」

ニコニコ笑うクリスに赤龍も微笑んで返した

再会<下>（後書き）

クリスマスみたいな弟が欲しいなあっと思いつきながら

暗雲（前書き）

中々くつつくような状況ではない赤龍とレイン・・・事態は一転

暗雲

豊穰の祭りから三週間

事態は緊迫したものに变化していた

シュレイア家の屋敷の一室、

レイン・アリア・キリクと領主夫妻は難しい顔をして額をつき合わせていた

「……その表情は普段の彼らを知るものなら驚くほど、厳しいものだった

「そう、リオルの国が、また……」

「ヴォルケの領地に侵攻しているらしくてな……小さな争いは今までも何度かあったみたいだが本格的な侵攻は現在のリオルの王が即位の折以来だ。」

「ヴォルケの領民は？どこまで侵攻が進んでいるのかしら」

「損壊は7割。おまけに死傷者の数は不明だ。あの領地は貧富の差が激しい。領制で定められている独自の身分の中でも、下位層全体像が掴めていないからね。」

「侵攻にいたっては現在ヴォルケ領主の屋敷すぐ間近まで迫っているそうだ。」

「……最も、昨日の情報だから既に落ちたかも知れぬ」

「……リオルとは人類至上主義を謳う軍事国家であり、魔法国家。エーティスの北西に面している国で人類至上主義を謳うだけ

あつて龍の治めるエーティスとは争いの絶えない国だ
ただの人が、巨大な力を持つ龍族に敵う訳がない。だがリオルには
世界でも希少な力を持つ魔法族が人口の6割を占める
龍族と相對して、勝機があるのは魔法族のみといわれている彼の国
だからこそ、永きに渡つて敵對続けることが出来るのだ・・・そん
なりオルは西の大領地、ヴォルケに隣する

「だけど、何故ヴォルケ領とリオルの境のライ山を抜けて侵攻して
きた筈なのにヴォルケ領主は対応が遅れたの？遅れたから侵攻を易
々許したのでしょうか？」

アリアの台詞にレインは目を細めた

ライ山はエーティスの中でも特に標高高く決して易々超えることの
出来る山ではない

オマケに隣国がリオルとあつて特に警邏は厳しいはずだ

「影の報告によると、警邏していたのは翼竜の騎士で、リオルの軍
は対翼竜の感覚を鈍らせる魔法を使ったそうだ。おまけにヴォルケ
の領主は隣の領主、アズナス領でのティーパーティーに出席で不在。
あの領地は独特の制度の存在のせいで、いざ侵攻が分かっても領主
の指示なしに勝手に動くことが出来ないからな。もう領主が分かっ
た時にはすでに領地には帰れない状況だったわけだ」

呆れたとばかりに息を吐いたレイン。その溜息は部屋に集まる領主
一家の心を代弁したようなもので、皆が皆、似たような顔をしていた

「この侵攻で間違いなく赤龍様をはじめとする龍族の方々が前線に

立つはずだ。

「……………どういうことか分かるな？」

「久方ぶりに国内が戦場になるわけね。被害が計り知れないわ」

「保存が利かない物はさておき、領民達にも暫く節制を呼びかけて、節制で浮いたものは須らく保存しないとね。すぐに各集落や町に伝令しましょう」

「今年が実り多い年で良かったよ……引き続き、影達に情報収集を頼まないかね」

「警備のいつその強化を。いくらリオルの国がシュレイアと間逆にあるからといって、安心なんて出来ないぞ」

エーテイスに暗雲立ち上る

「黄龍様、出陣の許可を」

「ヴォルケ領主からも救援の声明が届いております！！」

「赤龍様に出陣の要請を！！」

謁見の間、黄龍の眼下で至急集まった上級貴族たち

黄龍は重々しい溜息を吐いた後、傍らに控える樹龍を見やる

「シヴァ、アルテナと金竜、銀竜と共にヴォルケ領へ」

「御意に」

「赤龍は待機。翼竜の一団を連れて行きなさい」

「畏まりまして」

黄龍と樹龍の会話に驚愕の声が上がる

何故戦闘ならば絶対の力を持つ赤龍を出陣させないのか

「私の決定に、何か文句があるのか」

「そんな！！滅相もない！！」

「ならば待機せよ。そして心得よ

此度の戦、赤龍が出て終わりということにはならぬだろう」

黄龍の台詞が謁見の間に響いた

異邦の影

ヴォルケ領襲撃の情報が届いて三日

緊張はシュレイアの地を包む。リオルからは最も遠いと言って差し支えないが、それでも警戒するに越したことはなかった

ヴォルケにはアルテナ様達が向かい、黄龍様や赤龍様は今のところ様子見のようだ

各領主達が赤龍様を！！と要望している様だが、その要望は通っていない。

・・・というか通らなくて当然ではないだろうか？目先のこと
に捉われすぐに排除しようという気持ち一つで言っているのだろう
が、そもそも八龍の一人が出撃しただけで相当な被害が出てしま
う。この場合の被害というのは民間人の事だ。強力な力をお持ちの
八龍様は周囲に与える影響が大きい。

これが八龍様の中でも純粋な力だけなら黄龍様をも超える赤龍様が
出撃すれば間違いなくヴォルケの領民は灰塵の中に帰すだろう

あるいは貴族にとって領民など挿げ替えのきくモノという認識なの
かもしれないが。

「レイン、黄龍様から食料と物資の支援を願えるか？という文が来
たわ」

「勿論 是。それから西の領地から平民が流れ込んでくるかもしれ
ないから、役所の人間の数を増やしてね。受け入れるけれど、チェ

ツクは念入りに。間違つてもリオルの兵士を入れてはいけないわ」

「勿論よ。……………レイン!!??」

「予測の一つとして考えてあつたわ……………でも本当に厄介な」

シュレイアの上空に現れる黒い影

一見その巨体に龍かとも思うが広げられた翼、尾羽を見れば違つと分かる

リオルの軍兵の移動手段のひとつ、怪鳥サンダーバード

本来ならば東の端のシュレイア領まで来ることなく領空を守護する翼竜たちに撃墜されるはずなのに。

ヴォルケ領に侵攻した時同様翼竜の感覚を鈍らせてきたのだろう

レインは勤めて冷静に、領民を領主の屋敷および近接する避難場所まで火急に避難するよう領民達に伝えた。同時に火急時に鳴るサインが領地を木霊する

「目的、何だと思う」

「兄上。……………まさか食料奪いに来たわけではないでしょうね。となれば、私達シュレイア家の殺害ないしは誘拐が目的かと思えますわ」

世にシュレイアの傑物と知られるようになってしまったレイン達シュレイア家の三人、キリク・アリア・レインの存在によって底上げされたシュレイアの地

見た目、田舎町でのんびりした生活を送っているように思われがちだが、端々に見える技術は、大領地に比べても遜色ない。否、むしろ上回っている部分すらある

少し調べれば分かること

だがエーティス国内の者は所詮は田舎領主と見向きもしない
鋭く観察してきたのはむしろ近隣諸国

何時か、出すぎた杭がうたれるように、襲撃される日が来るかもしれないとレイン達は最悪を想定していた

ゆえに他領はすることの無い避難訓練をし、いざという時にすぐに逃げれるように領民達の意識に緊急時のマニュアルを植えつけてきた

ものの数分で領民の姿が見えなくなったことがその証

最悪を想定するくらいならば、領地改良を目を付けられるほど早くしなければいいと思うかもしれない
だが、それはできなかった

その理由が、シュレイアにはあった

急がなくてはならない理由が。改良を行ったことに後悔はない

だが、この襲撃で民を失うことになるとしたら私は……………

……………

「レイン・シュレイア

領民が大切ならば我らと共に来てもらおうか」

サンダーバードの背から降り立ち此方を見る男の台詞

レインに勿論、否やはなかった

「姉上、兄上、あとは任せました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・くれぐれも気をつけろ」

「領地は任せて」

兄と姉の言葉に背を押されサンダーバードに近づく

侵入者の男に手枷を嵌められると視界が回る

「・・・・・・・・・・俵担ぎは遠慮したいわ」

肋骨の間に食い込む鎧が痛い

「ならば横抱きにしようか？」

「・・・・・・・・・・俵よりはマシね。お願いするわ」

「・・・・・・・・・・肝の据わった奴だ」

「お生憎様ねえ。この程度で驚くほど精神が柔やわに出来てないのよね」

溜息を吐く

誘拐くらいで喚く（わめく）ならば、転生した時に発狂しているだろう

男は面白いものを見るように私を見て、サンダーバードの背に乗り

上げた

「さぁリオルに招待しよう。レイン・シュレイア嬢」

「…………お招き預かるわ」

サンダーバードは高く舞い上がり彼方へと消える

その様子を齒噛みしながら見ていたキリク達はすぐに黄龍に報告すべく踵を返したのだった

異邦の影（後書き）

レインの肝の据わり方は尋常じゃないと思います（笑）

田舎領主の娘とリオルの国王

王宮らしい、華美な謁見室

未だ若いリオルの王はレインの居る場所よりいくらか高い玉座に腰を下ろしていた

「ようこそ、リオルへ。レイン・シュレリア嬢

・・・お加減は如何か？」

「体調最悪ですね、だから空の旅って嫌いなよね・・・

・・・初に目に掛かります、リオル国王殿。

エーティスはシュレリア家の次女、レイン・シュレリアと申しますれば

早急に此度、お招き頂いた理由をお聞かせ願いたい」

臆した様子もなく敵対国の国王に最上級の礼をする

「リオル国王、フェンネルだ

しかし、流石噂に名高いシュレイアの次女殿だ。肝が据わっている。つしやる。

聞けば抵抗一つされなんだとか」

「生憎、他領の事情は知りませぬが、我が領には軍がありませんから。

悪戯に民の命を失うつもりはないですからね。

私達を守るべきは私達の命でも血でもなく、黄龍様からお預かりしている民草の命ですから。」

「立派なお考えですな」

「嫌味は結構。それより、お聞かせ願えますか、私を招いた理由を。」

「そう急かれるな。食事でも如何です」

「……ご相伴預かりますわ」

招かれたのは、謁見室同様、華美な部屋で、長細い机の両端にそれぞれ席が用意されていた。

レインを誘拐した男もリオル国王の少し後ろに控えている

「私の後ろ、貴女を連れてきた男はガイという。我が国の航空師の師長だ」

「左様ですか。」

「では召し上がってください。我が国の料理なので貴女の口に合えばいいのですが」

「頂きます。」

特に抵抗することも、躊躇う事もなくリオルの料理を口に運ぶレインに、リオル国王は僅かに驚いて見せた

「何か？生憎、リオルの食事作法は存じておりませんのでお目汚ししたら申し訳ありませんわ」

「いいや、作法は問題ないように思われる。私が驚いたのは貴女が躊躇いなく口にしたからだよレイン殿。毒が入っているとは思わないのか？？」

「毒を入れたのですか？」

「誓って、ない」

「左様で。．．．貴方達は私に何らかの価値を見出され、此処に連れてきた。」

ならば毒を入れる必要はないと踏んだのです。

そも、殺す気ならばシュレイアでとつとガイ殿が殺しているでしょうしね。」

「貴女は冷静だ。」

「お褒め預かり光栄です」

クツクツとレインの言葉に笑うリオル国王。その笑みは先程まで浮かべていた冷たい笑みでも作った笑みでもなく、彼自身の笑みなのだろう。不意に浮かんでしまった感がある

「左様、貴女には価値がある。正確には貴女の知識に」

「．．．．．」

「シュレイアの傑物は三人いると周辺各国には知られているが、正しく傑物は貴女だ。レイン殿。」

アリア・シュレイアもキリク・シュレイアも秀才ではあるが、あくまで秀才。

貴女が本当の傑物だと、調べるのには結構手間が掛かりました。

敵国ということもさることながら、貴方達シュレイア家の情報は綿密に秘匿されていましたからね。

正しい家族構成も、領地の民の正確な数すら、調べることに時間を有した。

全く天晴れなものですな」

「お褒め頂き、光栄ですわ

リオルの孤高の獅子殿。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・おまけに此方の情報は筒抜けと見える。」

「筒抜けというほどではないですよ。エーテイスの中では知っているほうでしょうけど。」

さらりと言つてのけるレインをリオル国王は過不足なく評価した

「貴女が何故、一介の田舎領主の娘で収まっているのか不思議でありませんな」

それはリオル国王の正当な評価だった

赤龍の、感情を露あらわにした声を領主達が耳にしたのは、初めてであった

「黄龍様、我が参ります」

「行ってくれるか」

「是非、行かせて下さい」

赤龍と黄龍のやり取りに領主達は焦る

「お待ち下さい！！！！たかが一人の地方領主の娘の為に赤龍様が
リオルに向かわれるのですか！！！！？？ヴォルケで今も侵攻を続
けるリオルの軍の一掃はどうなるのですか！！！！」

「それに関しては、私も同意見です」

「キリク・・・！！！！？？？」

領主の声に賛同したのは、キリクで、一同が驚く
是が非でも、妹の救援を求めると思ったからだ

「赤龍様、黄龍様、お心は有り難いのですが、謹んで辞退申し上げ

ます

レインは、必ず自分の力で戻ってくるでしょう。
もし殺されるのならば、シュレイアで殺されていたはずです。

リオルの者は意図することあってアレを誘拐したのならば、アレにも手はあるでしょう。

八龍様の御手を煩わせるほどのことではありません」

「自力で一人で戻ってくると・・・??」

「そうするのが、傑物レイン・シュレイアで御座いますから。

どうか当家の傑物を信頼頂きたく存じます」

深々礼をするキリクに黄龍と赤龍は何も言えず黙り込む

余りにも無謀な。と一蹴するは容易く、しかし此処でキリクの言葉を無視し、赤龍を出動させれば他領主達からの反感は凄まじいものがあるだろう。

特にヴォルケとヴォルケに隣接するアズナスからも再三再四の赤龍への要請を棄却しているのだ

黄龍も、赤龍も、キリクに賛同するほかなかった

ドンっという大きな音に頑丈な赤龍の宮の壁に大きな亀裂が入る

「レインっ」

初めて、心からの微笑をくれたか弱き人の女性

その人が、身を危険に晒しているのに何も出来ない自分が憎い

拳を握りしめ、掌から鮮血が流れても関係なかった

ただ、悔しくて

哀しくて

レインの無事を祈り続けた

リオル（他国事情）

食事も終わり、この世界の茶を出され、部屋から料理の給仕などをしてくれたメイド（仮）や執事（仮）が出て行ったのを合図にリオルの国王は真剣な眼差しでレインに本題を切り出した

「・・・・・・・・・・・・・・・・もう一度お願いできますか??」

耳がおかしくなった記憶は無いのだが、どうも幻聴が聞こえた

レインが問い返せばリオル国王は苦笑して、もう一度口を開いた

「レイン」シュレイア殿

貴女に、我が国リオルと貴国エーティスの永きに渡る戦の停戦の実現の為に、黄龍殿との仲介人を頼めないだろうか」

幻聴ではなかったらしい。レインは失礼に当たらない程度にリオル国王をマジマジ見つめた

そも、エーティスとリオルの戦争は一朝一夕のものではない。黄龍様は一代だが、リオルでは十数代に渡つての、本当に永く永く続いた戦争なのだ

その確執は深く、どちらか一方が滅びるまで続くと、どちらの国もそう思っていたはずだ

「戸惑われるのも無理は無い。私も貴女の立場なら耳を疑うだろう。冗談とも畏とも思っだろう」

だが紛れも無い真実なのだ。

私はエーティスとの停戦を求めている」

真摯なその眼差しに、戸惑う

「ならば、何故、今だに我が国に侵攻を続けているのですか」

そう、停戦を望むならば何故より溝を深めんとするのか、その真偽は

「な、に？」

「ですから、何故停戦を望むのにわざわざ此方を煽る様に侵攻してきたのです？それでは性質の悪い冗談にしか取られない」

レインの台詞に、リオル王は目を見開き、すぐに厳しい視線を傍らに控える航空師長のガイに向ければガイも厳しい表情で一礼して部屋を出て行った

これはどういう事なのか

まさか、いくらなんでも我が国への侵攻が王の知る所ではないと言うのだろうか

そんな馬鹿げた話、いくらなんでも有り得ないだろう

「レイン殿、私が今言ったことに偽りなどない。

だが、真実、現在リオルの軍が貴国に侵攻しているのであれば、事情が変わってしまう」

「どういうことでしょうか？まさか本当に貴方の思惑とは異なる事態が起きていると？？」

「もし本当に侵攻しているのならば、それは私の意図することではありません」

「まさか……貴国の体制はかなりしっかりしたものだった筈。愚王ならば、反逆が起きても可笑しくないが、貴方は近年稀に見る希代の王と称されているはず」

「本当に敵国事情にお詳しい。そう、父や祖父の代に比べ、私の代は随分落ち着いていると自負しています。しかし、私の思惑とは異なる者達が居るのもまた、事実」

「それは教会のことでしょうか？」

「……本当に詳しい。そう、我が国は、私達王族ともう一つ、教会が権力を握る。どちらの権力が上かと問われれば、王族なのですが、それでも教会は多くの内情に口を出す権力がある。彼らは、我が国の人間至上主義を謳う象徴なのです」

まるで中世のヨーロッパのような実情
知ってはいたもののこうして権力者の口から改めて内情を聞くと本当にそっくりだと思った

「フェンネル様」

ガイが戻ってくる

その顔色は決していいものではない
それが如実に現実を示していた

「やはりエーティスに侵攻しているようです。教会の命令で航空師
の幾つかの部隊が出動しています」

「っやはり」

「如何なさいますか」

「決まっている。侵攻をこれ以上させる訳にはいかない
出るぞ」

リオル王のその目を、顔を、遠い昔見たような気がする

レインは近視感に襲われながら、一つの提案をした

響く声

レインには、リオル国王の眼差しに覚えがあった
とても、とても大切な、ヒト
最早永久に見えることが叶わぬヒト

その眼差しに秘めるは覚悟

戦場を知るものが、護るものがあるものの瞳に宿る炎
かつて近所の同窓の男の子に、父に、兄に、夫に、その炎を見た

女は戦場には立てぬ

日本で待つしかなかった、遠い昔
愛しいもの達が、誰よりも危険な死地へ往こうというのに、何一つ
出来なかった私の胸に宿るのは苦い思い

何時だって、前しか向かないものには、見えぬもの
リオル国王も、そして赤龍様も、そういう眼差しをされる

簡単に投げ出すヒトは嫌いだ
残される者が何も思わないわけではないのに

リオル国王は、愚王ではない。希代の王と称されるほど期待され、
応えてきた人だ
だが、今回私を攫って来た事といい、少し考えが足りぬようにも思
える

一国の王ともあろうものが、二大勢力の片翼の抑制の為に戦地に立

とうとう

下手しなくても国が割れるだろう

何せ片翼はこの国の信仰を司る教会

王が、教会ではなく、今まで敵対していたエーティスの肩を持ったとなれば反発は必死

内からリオルは破滅に向かうだろう

「ではどうしろというのだ！！！！もう、この国はっ」

「並々ならぬ事情があるのだとして、それを未だ敵国の地方とはいえ領主の、娘に言っではなりません。貴方はもっと強かになるべきだ」

「っ」

「私は、領主の娘としては貴方を正當に評価します。しかし個人としては、貴方のような王は賢帝とは呼べない。」

「小娘！！！！！！！！」

私の言葉にガイさんが剣を抜こうとする

確かに仕える王を冒瀆されれば怒るだろう

だが言わせて貰おう

この国の民でない私に、言う義理は無いのは分かるのだが、この人に言うことで遠い昔言う事の出来なかった自分に対して必要な気がした。所詮は私のためなのだけだ

「貴方は、賢帝ではない。簡単に戦場という明日をも知れぬ場所に往かんとするのは愚王のすることです。貴方は、もし戦場で、何が死へと直結するかも知れぬ場所で、ナニかあったら国民にどう顔向けする気ですか。それも、事情も知らぬ国民からしたら、今まで賢帝と、希代の王と信頼を寄せていた人が、敵国ではなく、自国の討伐に向かったと知れば、国民は何を抛り所にするんです。何に怒りを向けたらよいのですか。」

常に最善を、考えぬものは賢帝ではない。自分の命も、丸ごと抱えて、喪わないように最善を考えて下さい

王である貴方は、教会に従う者として国民ということを忘れてはなりません」

フェネルの覇道（前書き）

フェネル視点

フェンネルの霸道

レインの静かな説教は、確かにリオル王フェンネルの心に響く
本来ならば、自身で理解しなければならぬ事なのだ

そう、レインの言うとおり、フェンネルは、一国を束ねる王で無く
ばならない

誰よりも自信に満ち、霸道を往かねばならない。そして誰より民を
思い、民の為に在らねばならない。それが、フェンネルの王を継い
だときから課せられた義務なのだから。

リオルの国王は、最強で最高で孤高の存在であるべきだ。それがリ
オルの民が王に求めるものだから。

だが、歴代の王達が簡単に民から求められている王になれなかった
ように、フェンネルにも又、霸道の前に聳え立つ壁が存在した

・・・・・・それが<教会>である。

もしかしたら、教会が悪か正義か・・・・二択だったならばもつと
話は早かったのかも知れない

教会が決して公に出来ぬような、様々な実験を繰り返してきた闇歴
史を知っている

教会を悪とするのは容易い

だが闇歴史を知る一方で、それが自国の為にしてきたのだということを知っている

非道な、と罵るは容易いが、少なからず助けられてきた歴史も又、知っているからこそ絶対悪に出来ない現状がある

霸道の前に、聳え立つ教会という高い壁

歴代の中でも賢君と名高いフェンネルであつても教会に強く言えないのは歴代の王達と同じなのだ

だが、このまま教会の示すように人類至上主義を謳ってエーティスと戦い続ければ確実に自国は滅びるだろう

いや、もう手遅れなのかもしれない

エーティスとの永きに渡る戦争で、確かに魔術は進歩している。

だが、比例するように国は疲弊しているのだ

おまけにリオルは自国より更に北方にあるシュナイデルと食料を巡って度々戦をしている

二国と争っている余力は、最早リオルにはない

誰よりも、おそらく現状理解している自分だからこそ、せめて、より被害の大きい戦を食い止めなければと思った

強引だが、エーティスの中で民から定評あるシュレイアの傑物を味方にすれば、黄龍殿とて無碍には出来ないだろうと、浅はかな考えを持ってしまった

時間が、リオルにはなかった

「・・・・・・・・・・確か、貴国の連絡手段の一つに映像魔法がありましたね」

「よくご存知だ。リアルタイムで連絡することの出来る魔法です」

「黄龍様に繋いで下さい。事情を説明しましょう
我々<人>と違い永く生きている彼の方ならばきっと力になって下さるでしょう」

「我が国が敵国であってもですか・・・・・・・・」

自嘲をこめた私の台詞にレイン殿は眉根を寄せて此方を見る

一瞬で、十代の娘なのに驚くほど、此方を圧倒する雰囲気纏った彼女は怒ったように口を開く

「すでに諦めたような表情をなさらないで下さい
貴方は何があっても最後まで諦めてはいけませんのです。藁にも縋る思いで敵国から私を連れてきて、仲介人をさせようと思ったはずでしょうに。確かに貴国は現在も我が国を侵略中です。」

だからこそ早急に侵略を止めさせ、我が国も貴国も出来る限り被害を抑えなければならぬのです。

そうでなくば停戦など夢のまた夢。そうでしょう？

それに我が国の頂点は、懐深い方です。

巻き込まれてしまった以上私も全力で停戦に向けて働きかけましょう。だから貴方は最期まで諦めぬことを約束して下さい」

まっすぐに、此方を見るレイン殿に、侵攻を知って早々に諦めかけた思いが再び溢れる

「沢山迷惑をおかけしていますねレイン殿

もう少し、お付き合い願えますかな」

「勿論です。巻き込まれた以上此処でハイさようなら。と言えるほど最低な人間に成り下がった覚えはありませんもの」

ふふ、と微笑むレイン殿の笑みに背中を押され外で控えていた侍女を呼び映像魔術をつなげる準備に入った

フェンネルの覇道（後書き）

微妙・・・..
すいません汗
次話は頑張ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241q/>

赤龍と田舎領主の娘

2011年10月9日00時26分発行